
魔王陛下、お仕事ですよ

鈍色満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下、お仕事ですよ

【Nコード】

N0974Y

【作者名】

鈍色満月

【あらすじ】

「――ふー。勇者の奴、漸く帰ったか」

異世界から召還された勇者は、長い長い旅の末に魔王を討ち滅ぼす。魔王討伐に成功した勇者一行が魔王城より立ち去った後、主を失い、廃墟と化した魔王城の一角にて蠢く影が。

それこそ幼子の姿こそしているが、先程勇者に寄って止めを刺され、滅ぼされた筈の魔王であった。

「全く。魔王様が本気になればあの様な餓鬼なんぞ、一発で昇天だ
というのに……」

「ぶつぶつうるさいぞ、そこ。口動かすなら仕事しろ」
愛すべき魔族達に囲まれて、今日も書類仕事に勤しむ魔王陛下。魔族の父であり母である魔王の平穏なる(?) 日常の数々をどうぞ、お楽しみください。

終わりに始まる物語（前書き）

勇者一行のメンバー

- ・ 勇者（異世界人）
- ・ 弓使い（頼れる兄貴分）
- ・ 僧侶（温和な平和主義者）
- ・ 女魔法使い（典型的ツンデレ）
- ・ 盗賊（生意気な子供）

終わりから始まる物語

——暗雲渦巻く、奇形の鳥達が飛び交う暗黒の城・魔王城。
その城の奥の奥、深部の深部。

魔王とのラストバトルに相応しい、巨大な大広間では死闘が繰り広げられていた。

「——覚悟しろ、魔王!!」

やって来たのは、異世界から世界を救うために召還された勇者とその仲間達。

白銀に輝く聖なる剣を握りしめ、前を、魔王を見据える視線に迷いは無い。

既に戦いは長時間に及んでいる。

幾ら百戦錬磨で知られる勇者とその仲間達をもってしても、魔族の王にして闇の眷属の頂点であるという魔王を相手に無傷で済む筈が無い。

戦いが長引くにつれ、勇者にも、その仲間達にも、傷が増えていく。

『グオオオオオ——!!』

しかし、それは彼らと対峙する魔王とて同じ事。

両者が相見えた際の、何処か人間離れした魔性の美しさなどとうに消え失せ、魔王は今や人の形を留めぬ異形の姿をしている。

「くっ! しぶといな!!」

「腐っても相手は魔王ですからね」

弓使いが滴る血を鬱陶し気に拭いながら吐き捨てると、温和な顔立ちの僧侶が頬に汗を滲ませながら同意する。

勇者一行の焦りを感じしたのか、異形の姿となった魔王がますます攻撃の手を強くする。

それを女魔法使いの結界でなんとか凌ぐが、相次ぐ攻撃の数々に徐々に結界に輝が入っていく。

「勇者！ この結界が破れた時が勝負です！ 一瞬だけ魔王の動きを止めますから、貴方はその隙に！」

「分かった！」

僧侶の悲鳴の様な叫びに、勇者が頷いて聖剣を握りしめる。

甲高い破碎音と共に女魔法使いの結界が破られ、同時に僧侶の詠唱が完成した。

「今だよ、勇者！ やっちゃって！！」

未だ幼い盗賊が勇者を振り返る。

僧侶の呪文によって創られた黒鉄の鎖が魔王の動きを拘束する。

動きを封じられ、魔王が悔し気に咆哮を上げた。

———そうして。

「わあああああ！！」

勇者が叫びながら、魔王へと特攻する。

彼の持つ聖なる呪文を刻まれた聖剣が閃光を放つと、そのまま魔王の体へと突き刺さった。

『ぐ、ぎゃあああああ!!』

弱点である心臓を聖なる剣に貫かれ、魔王が断末魔の悲鳴を上げながら一気に灰と化する。

大きく息を吐く勇者の目の前で、彼の旅の目的であった、世界を破滅へと導くと伝えられる魔王は消え失せた。

「お、終わった……」

精魂尽き果てた勇者の膝が崩れ、彼の仲間達が慌てふためきながら勇者へと駆け寄っていく。

やがて、魔王という脅威を見事退治し、世界へと平和を齎した彼らを祝福する様に、魔王城へと一条の光が差し込んだのであった。

終わりに始まり物語（後書き）

次の話より本編開始です。

勇者の去った魔王城（前書き）

終わりにから始まる物語、その通りです。

勇者の去った魔王城

先程までの激しい死闘の跡が残る、魔王城深部。

普段であれば魔族の王が配下の者達と謁見に使うそこは、所々崩れ落ちた壁面の隙間からは日差しが差し込み、砕けた石造りの柱の欠片が乱雑に転がる、何とも哀れな空間になっていた。

壇上の真紅の垂れ幕が半分引き千切られた上に埃を纏った情けない姿を晒している中で、壇上中央の黒と金で飾られた玉座だけがその姿を傷付ける事無く、完全な形を残していた。

魔王は消え失せ、勇者が去った後の空間に幼い声が響き渡った。

「————ふー。勇者の奴、やっと帰りおったか」

まさに魔族の王に相応しい、他者を威圧する玉座の後ろから出て来たのは、小さな人影。

歳の頃はおそらく十歳程度の幼子。

体の至る箇所にも埃を付けたまま、子供は大きな溜め息を吐きながら、半壊した謁見の間を見渡した。

「やれやれ。修繕とてただではないのだぞ、勇者の奴め」

ぱんぱん、と服を叩いて埃を落しながら、幼子が呟く。

その稚い容姿と相反した老成した眼差しで視線を巡らせる子供の姿を、去って行った勇者達が目撃したならば、おそらく悲鳴を上げたに違いない。

肩まである光を吸う様な黒髪に、金色がかった琥珀の双眸。
雪の様に真っ白な肌と鮮やかな朱唇。

指の爪先から髪の一筋に至るまで完璧な美の極致とも言えるその姿。

美しいけれど、男とも女とも判別出来ぬ、中性的な顔立ちの幼い子供。

その子供が、先程勇者一向によって退治された筈の魔王と同じ顔をしていたのだから。

より正確に言えば、勇者一向のせいで異形の姿となる前の魔王とではあるが。

魔王と瓜二つの美しい容姿の子供は、再度溜め息を吐くと、踵を高く打ち鳴らした。

すると、押し進められた時計の針を巻き戻す様に、室内に散らばる瓦礫の山がゆっくりと動き出す。

崩れ落ちた壁面の欠片は碎かれた箇所を塞がれ、碎けた柱は真っ直ぐに。

所々陥没した床面は元の滑らかな姿を取り戻し、引き千切られた垂れ幕は修繕される。

「……まあ、ざっとこんなものか」

立ち所に謁見の間を元の壮麗な空間へと戻した子供は、満足げに辺りを見回す。

そんな子供に、怜悯な声かけられた。

「————お戯れが過ぎます、我らが魔王陛下」

魔王、と呼ばれた子供がゆっくりと振り返る。

琥珀の視線の先にいるのは、先程勇者一行と共に去った筈の僧侶

であつた。

その訳その意味その理由

「やあ、僧侶。中々怖い顔だな。勇者が見たら卒倒するぞ」

「……何故このような真似をなされたのか、理由をお窺いしても？」

とうに魔王城より勇者と共に去った筈の、しかも敵である筈の僧侶に向けて、魔王と呼ばれた子供はニヤリと笑みを浮かべる。

茶化す様なその仕草に、僧侶の眉間の皺が深くなった。

「貴方様が気まぐれで動く方だと言うのは我らとて承知の上ですが、その様なお姿になられてまで、何故このような洒落にならぬ戯れをなされたのですか？」

「怒るな、怒るな。折角の綺麗な顔が恐ろしい事になっているぞ」

くすんだ色の飾り気も何も無い僧服を纏っている僧侶は、よくよく見れば整った顔をしていた。

地味な格好と短く切り揃えられた髪に縁なしの眼鏡のせいで、その容姿はどこか乾いた物として他者の目には映っていただけ。

魔王と呼ばれた子供の言葉を聞き、僧侶が鬱陶し気に付けていた眼鏡を外して薄茶色の髪を掻き揚げる。

すると次の瞬間には、先程までそこに居た地味な僧侶は消え失せ、他者の目を集めずにはいられない、伶俐な美貌の青年へと姿を変えていた。

薄茶色の髪から、銀糸の混ざった灰髪へ。

温和な輝きを宿していた茶色の双眸は冷たい光を宿した藍色に。

その身に纏う質素な僧服でさえ、まるで貴族の礼服を着ている様な錯覚に陥らせる。

「わざわざこの私を人間に扮させ、勇者一向に加入させたのです。当然、それなりに意味を持つ行為であったのでしょねえ？」

その殷勤無礼な態度に子供は腹を立てる事無く、滑る様な動きで壇上より降り立って、僧侶であった青年の前へと歩を進める。

「その点に関してはよくやってくれた。勇者一行が無事に此処まで辿り着けたのもお前のおかげだ。感謝するぞ、藍玉^{らんぎよく}」

「お褒め戴き恐悦至極、我らが魔王陛下。――ですが、誤摩化されません」

ギン！ と殺気立った眼差しで青年が魔王と呼ばれた子供を睨みつける。

「何故、危険を犯してまで、あの様な餓鬼に討たれる真似などなされたのです？」

「だって、仕方ないじゃないか。――あの勇者、泣いてたんだから」

居心地悪そうに、明後日の方向へと視線をそらした魔王が、口を尖らせた。

その訳その意味その理由（後書き）

魔族の名前は漢字二文字で色がつきます。

一方的な邂逅

———まあまあな月の夜であった。

初代にして永代たる魔王はその晩、一人で出歩いてた。

普段だったら口うるさい一部の魔族（例えば藍玉）が護衛と称して傍をいるのだが、不意の気まぐれで出かけたただけであって、魔王の側には誰もいなかったのだ。

それこそ風の向くまま気の向くまま、悪戯にあちこちを歩き回っていた魔王であったが、少しばかり休憩しようと思い、たまたま目についた森へと降り立った。

森の側にはそこそこの大きさの村があり、夜遅くだというのに煌々と松明の光が村中に灯っていたから、どこからか貴人でも来ているのだろうか、と魔王は思った。

祭りだったらこっそり紛れて御馳走でも摘まめないだろうかとか、半ば魔王にあるまじき事を考えていたら、魔王の鋭敏な聴覚が奇妙な音を聞き取った。

何かを啜るような情けない音と途切れ途切れの嗚咽。

さては村の子供が泣いているのかと、魔王が一人納得していると、目の前の木々が揺れる。

———そうして出て来たのが、この度、異世界から召喚された勇者であったのだ。

＊ ＊ ＊

「ひっく、ひっく。うう……」

「おい……」

「どうせ、どうせ僕なんか……」

「おい。おい、その」

「——なんて出来るわけないよ……ぐすっ」

「聞いとんのか、小僧!」

「びゃっ!?!」

あまりにも無視されるもので、ついつい声を荒げると世界を救う筈の勇者の肩が大きく震える。

ビクビクとまるで人に慣れない小動物めいた言動に、魔王が小さく微笑む。

「おい、何をそんなに嘆いている。話してみろ、少しは気が楽になるかもしれないぞ」

「そんな事言ったって……」

あまりにも悲観的な言動に、本当にこいつは勇者なのだろうかと思魔王は思った。

この世界の生物とは異なる独特のオーラと腰に佩いた聖剣からして、つい先月に某・王国で召還された筈の勇者である事は間違いないだろうが、この覇気のなさは如何したものか。

なんて事を魔王が考え込んでいるとは露知らず、（暫定）勇者の方は視線を地面に落としたまま、ぶつぶつと何か呟き続けている。

「——取り敢えずお前、その鬱陶しい言動を直ちにやめろ。聞いてて苛々する」

「ひい! 何か色々すみません!!」

自分でもかなりドスの聞いた声で脅しをかけると、勇者は背筋を伸ばして漸く視線を上げる。

焦げ茶色の髪に同色の瞳と言う、取り立てて何ら変哲の無い容姿の青年、いや少年だ。

「それで、何をそう、悲観的になっているんだ？ 女にでも振られたのか？」

「なっ！？ 違います！！」

茶化す様にそう言ってやれば、顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけて来る。その姿が愉快で、魔王は喉の奥で笑った。

「そんな浮ついたものじゃありません！ もっと、もっと深刻な物なんです！」

「そうかそうか。なら、ますます話してみろ」

もしその時が昼間だったり、普段の様に勇者の周りに仲間がいたのであればおそらく勇者はそれ以上何も言わなかったであろう。

その日の魔王の格好といえば、黒の衣装で全身を包んだ上に、目深までフードを被った、ある意味不審者スタイルであったのだから。

しかし結局、様々な要素が加わって、勇者はその一言を口にしてしまったのだ。

「――魔王を倒してこい、って言われたんです。そんなこと僕には出来る筈なのに……」

――……勇者の話を纏めると以下の物だった。

勇者本人は異世界において特に秀でた所のない、平々凡々な少年であったと言う。

何ら変哲はない平和な一日、学校からの帰路の途中に足下に浮かんだ魔法陣に引き摺られる様にしてこの世界へと召還される。

見知らぬ場所であ会った自称・国王に、開口一番で世界の平和を齎すために悪の元凶たる魔王を倒して欲しいと頼まれる。

召還されたショックで何も言えない内に勝手に祭り上げられ、気が付いたら流されるままに勇者にしか抜けない聖剣を引き抜いたしまっていた。

そのせいで断ろうにも断れず、おまけに魔王を倒したと証明出来ない限り、元の世界に帰れない（帰さない）と宣言される。

仕方なく頼れる仲間と共に魔王退治の旅に出たのはいいけれど、旅の合間に聞いた魔王の恐ろしさにすっかりびびってしまい、こんな自分に魔王を倒せる筈が無いと思って時折旅の最中にこっそりと泣いていたらしい。

——そうして泣いてる勇者を目撃したのが、彼の旅の目的である魔王本人であると言うから笑える。

皮肉な巡り合わせに、中々不愉快な気分になった魔王であったが、魔王は本来人間達の間で伝えられている様な残虐な気質の持ち主ではなかったので、不運な勇者の気持ちを思いやって軽い溜め息を吐くだけに留めた。

「——と、いう訳なんですう。ぐすっ、ずず」

「……そうか。なかなか勇者も大変なのだな」

これまでの遍歴を思い出して、再び泣き出した勇者の頭を宥める様に撫でながら、魔王はフードに隠された琥珀の双眸を細めた。

今まで魔王討伐にやって来た歴代勇者達は『勇者』という選ばれた者であったことに過剰に自信をつけた勘違い野郎共であったため

に、返り討ちにしてやる事になんら罪悪感など感じなかったのだが、
今代の勇者はどうも違うらしい。

初めての異世界産勇者であるせいだろうか。

そもそも、何故に今代の勇者は異世界人なのだろう。

この世界の者が魔王を憎むのは理解出来るが、全く関係の無い異
世界人に魔王討伐を頼むなど、どうにかしている。

「もう泣き止め。ここで泣いているよりは、さっさと魔王でも何で
も倒してお前のいるべき場所に帰る事だけを考えていろ」

「で、でもっ！　なんか色々調べたら、元の世界に帰れる様な方
法は無いみたいで……」

「————は？」

旅をしている間に、勇者本人も様々な文献やら賢人と呼ばれる人
々に話を聞いていたらしい。

そうして調べた結果、元々異世界の勇者候補をこちらの世界に呼
び出す事は出来ても、勇者を元の世界に戻す様な方法が無いのでは
ないか、という結論が浮上したのだと。

「それは……酷いな。勝手に喚んだ挙句、還す方法がないなど」

「うう……。そう思いますよね、やっぱり」

——魔王が思う以上に、今代勇者の取り囲む環境は過酷であった。

今度は隠さずに重い溜め息を吐いた魔王に、勇者がびくびくと震
える。

先程も思ったが、どうも勇者というより小動物みたいだ。

「わかった。ここで会ったも何かの縁だ。後の事は気にせず、お前は魔王を退治する事だけ考えていろ」

「……………え？　で、でもっ!？」

「いいから」

何事かを言おうとしている勇者の目元を覆って、暗示をかける。

「お前は此処で誰にも会わなかったし、何も喋らなかった——いいな？」

「は、え？　で、でも……—はい」

泣き虫でも、さすがは勇者といったところか。

常人ならば逆らう事が出来ない魔王の力に暫く抵抗してみせたが、結局は精神的な疲れといった要素もあって、魔王が手を離すと大人しく頷く。

———ギクシャクとした動きで村へと戻る勇者の後姿を見送って、魔王は地を蹴って宙へと舞い上がると城を目指した。

一方的な邂逅（後書き）

勇者は自分に自信が無い子。
やれば出来るのだけれども。

魔王の企み

———勇者と出会った後の魔王は、それはもう精力的に働いた。

魔王補佐である藍玉を人間に化けさせ“僧侶”として勇者一行の中に潜り込ませた。

——目的は勇者の護衛と監視、それと計画通りに勇者一行を動かすための調整役として。

配下の魔族の中から、特に優れている者達を勇者召還を行った王国へと侵入させ、異世界干渉のための秘術について調べさせた。

——目的を果たした勇者が無事に元の世界に戻る様に送還の術を作らせ、二度と同じ事を起こさせない様に既存の術を使用不可能とするために。

更には魔王が持つ強大な力を練ってもう一人の“魔王”とでもいうべき、精巧な人形を拵えた。

——倒されてはならない、自分の代わりに倒されるべき存在として。

この計画で重要なのは“異世界から召還された勇者が、魔王を討伐する事”。

しかしながら、王として民を残して死ぬ事は出来ない。

そのため自分そっくりの身代わり人形を作って、それを勇者に“魔王”として討たせることにした。

以上の事をやり上げて後、魔王は勇者を自らの城へと招き入れる事を決断する。

まず藍玉にその事を伝え、勇者達を魔王城へと連れて来させる。

魔王城内に魔王配下の魔族がいないと変なので、やはり魔王が作った魔族そっくりの人形達を城に置き、代わりにそれらと勇者を戦わせた。

そうして、仕上げに勇者と身代わり“魔王”を戦わせ——討たせた。

——あまりにも完璧な計画に、その計画を立案し、実行してのけた魔王本人はうっとりしたのだが、その配下である藍玉はそうではなかった。

＊ ＊ ＊

「——なに悦に浸っているのですかっ!!」

「おお。なんか物凄く怖いぞ、藍玉」

眉を吊り上げ憤怒の表情になった藍玉は、元々が非常に美しい容姿をしているがために、とても恐ろしかった。

普段は冷たく理知的な光を宿している藍色の瞳は血走り、額には青筋が浮かんでいる。

「言わせてもらいますが、この計画のどこが完璧なのです!？」

「聞き捨てならんことを言うな。立案者のオレでさえ、余りの出来の良さに自分を賛美したというのに」

「結果として陛下がそのようなお姿になられた時点でそれは失敗です!!」

びしっ! と人差し指で恐れ多くも魔王陛下を指差しながら、藍玉は叫ぶ。

「……この姿の事を言っているのか? 可愛いだろ?」

にっこりと微笑んで、その場でくるりと魔王がターンする。

二十歳前後の大人の姿でされたら少しばかり敬遠するその仕草も、今の十代の子供姿である魔王であれば可愛らしい。

その言葉に、藍玉が苛立たし気に髪の毛を掻きむしる。やや乱暴な仕草だが、彼がやればそれすら麗しく見えた。

「姿は二の次です！ 私が言いたいのは陛下の御力についてですっ！」

「……それは仕方あるまい。さすがのオレとて、今回の件はかなり苦労したからな」

本来の魔王の姿は勇者が出会った、二十歳前後の男とも女ともつかぬ中性的な魔性の美貌の持ち主だ。

腰まである長い黒髪は光を吸収するようでいて、深い叡智を宿した瞳は金の色を帯びた琥珀色。

標準よりも背は高いが華奢で、細い体躯の持ち主——それが魔王であったのだが。

「随分と力を使ってしまったからな。器たる肉体がこのようになってしまったのも……仕方あるまい」

少女とも少年とも判別出来ぬ、美の極致とも言える麗々たる中性的な容姿。

肩に辛うじて掛かる程度の短い黒髪と金色がかった琥珀の瞳。

十歳の人間の子供程度の背格好で、美しさよりも可愛らしさやや強い——それが現在の魔王だった。

おまけに、その気があれば世界さえも一瞬で滅ぼせるのではないか、と囁かれていた魔王の強大な力は綺麗に失せ、能力の点につい

てだけ言えば下っ端魔族と同レベルにまで低下していた。

「これでは実質、魔王陛下が討たれたのと同様変わらないではございませぬか……」

「まあ、そうとも言えるな」

——暢気な魔王の言葉に、藍玉は大きく溜め息を吐いた。

勇者凱旋・1（前書き）

別名、魔王陛下の暗躍。
勇者凱旋後の話です。

勇者凱旋・1

———魔王。

今では人間の最大の脅威ということで、畏怖と恐怖でもって語られる相手でこそあるが、その存在の詳細について我々が知る情報は、極めて少ない。

……そもそも魔王と言う存在について、どれほどの者が詳しく知っているのだろうか。

我々が知りうる魔王についての情報と言えば、彼の王が光を吸い取る闇そのものの黒髪を持ち、金色の光を帯びた琥珀の瞳をもつ、男か女かも判じない美貌の持ち主であるという事。

あまりにも強大な力を持ち、その力でもって過去何度か起こった争い全てに勝利して来たという事実のみだ。

———筆者も一度だけ、彼の存在をこの目で見た事がある。

腰まである長い黒髪を風に靡かせ、その琥珀の両眼で眼下を見下ろし魔族を従えていたあの姿を脳裏に思いこすだけで、今でも甘美なる戦慄に襲われる。

……話を戻そう。

つまり所、筆者が言いたいのは魔王という存在に関して我々が知りうる事は、彼の者の脅威に比べると驚く程少ないと言う事だ。

旅の最中に出会った某・魔族に魔王について聞き出した所、魔族であっても彼の存在についての情報量が我々人間と同じ程度であったというのだから、これには筆者も驚いた。

ただ誇らし気にその魔族が語った事には、

「彼のお方は正しく我らの母であり、父である方である。無条件で愛情を与えてくれる親について子がそれ以上の事を知ろうとするのであろうか、いや、ない」

との事で、魔王の性別でさえも魔族は知り得ず、それでいて魔王を第二の両親とでもいうべき存在として崇めている事実が判明した。

上の某・魔族の陶醉具合からも分かる様に、魔族に取っては彼者は自分達の敬愛すべき存在であり、庇護者であるからこそ、魔族達はそれ以上の事を知らなくても構わないのだ。

しかし、魔王を最大の脅威と見なしている我々人間の立場からすれば、これは由々しき事態である。

敵を知らなければ、その戦は負け戦となる可能性が非常に大きい。そのためにも筆者の短き一生涯を書いて、私は彼の魔王とそれに従う魔族達についての出来うる限り詳細な記録を取り続けようこのペンをとったのである。

『人から見た魔族についての一考察 アルマース・シュタインベルツ著』

序章より抜粋。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「此所にいたのですか、勇者」

「―――僧侶さま？ どうしましたか？」

城の図書室で、古書のページを捲っていた手を休めて勇者と呼ばれた少年が振り向く。

開かれた扉の先にいるのは、勇者の仲間でもあり、一緒に魔王を討伐した僧侶であった。

「国王が呼びですよ。おそらく昨日の件に関してでしょう」

穏やかな風いだ声で僧侶が告げた内容に、勇者が顔を曇らせる。
未だ青年の域には届かぬ少年の憂いに、僧侶が眉間に皺を寄せた。

「如何しましたか？ 何か、不満でも？」

「いえ。ただ、僧侶さま……」

勇者は知っていた。

これまでの魔王討伐の旅の間に彼自身が調べた情報によると、異世界から物を招き寄せる事が出来ても、それを元の場所に戻す術は存在しないという事を。

長い旅の末に、勇者が凱旋したのはつい昨日。

望みの物は全て与えると告げた国王に勇者が願ったのは元の世界へ返して欲しいと言う切実な願いであったが、それが実現する事を勇者は半分諦めてもいた。

「……………っち。この様な餓鬼に何故魔王様は……」

「僧侶さま？」

暗い面持ちで沈んでいた勇者の耳に、僧侶が何事か呟いたのは聞き取れたが、内容は分からなかった。

不思議に思い、勇者は顔を上げたが、僧侶はいつもの穏やかな笑みを浮かべていただけだった。

「では、参りましょう。勇者」

「あ、はい」

穏やかだが断固な意思のこもった声に促され、勇者は席を立って、僧侶の後に従った。

勇者凱旋・1（後書き）

藍玉さん、色々と忙しいです。

勇者凱旋・2（前書き）

魔族の名前は漢字ですが、人間はカタカナです。

勇者凱旋・2

———そもそも、魔族という種は元々は存在しなかった。

今現在、この世界には四つの種族が存在する。

一つは筆者も属する人間族。

四種族の中でもっとも寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

二つ目は精霊族。

木の精霊族や土の精霊族など、細かく分類すれば多岐に渡るものの、彼らを大まかに分類すれば世界の元素に属する精霊族として纏められる。

三つ目は、今は去りし神族。

世界を想像したと伝えられる彼の種族は、遥かなる大昔にこの世界から去って新天地を目指したとされ、今この世界に残るのは彼の残した遺産のみ。

そうして、最後の種族が魔族である。

しかしながら、旧き書物を紐解いたとしても『魔族』という種族は表記されていない事が多い。

それは何故か？

その答えは、魔族と言う種族が元々は『混ざり者の一族』

———略して『混族』とされていたからだ。

彼らは元々、精霊族同士の混血児や人間と神族の間に出来た半神半人であった。

異なる種族の間に生まれた混血児は、他の種族に迫害される事も多々あり、特に古き血を尊ぶ木の精霊族エルフに於いては、生まれて来た混血児は母子共々殺害などといった乱暴な仕来りしきたも存在した。

この様に、半端物・混ざり物と馬鹿にされ、迫害される傾向にあった混血児達を、いつの間にか纏め上げたのが魔王であるとされる。彼の存在は一万年程前から書物に記載される様になり、旧き伝承によれば神族と剣を交えた事もあったらしい。

『混まざり物の一族』が『混族まぞく』から『魔族まぞく』と称される様になったのは、おそらく魔王と言う存在があった事が原因に違いない。

しかしながら、魔王という存在がどこからやって来て、何故『魔王』となったのか判明しておらず、未だ最大の謎のままである。

『人から見た魔族についての一考察 アルマース・シュタインベルツ著』

第一章 Ⅱ 魔族と言う種についてⅡ より抜粋。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「おお……。では、これが伝え聞いた魔王の御佩刀みはかしで間違いないのだな？」

———興奮した男の声が、広い室内に響き渡った。

「……はい。勇者と共に魔王討伐に参加した我々が、魔王討伐の証として持ち帰った魔王の遺物に間違いありません」

「――どうぞ、陛下。近くに寄られて御確かめください」

豪華な飾りが至る所に施された室内にいるのは、勇者をこの世界に呼び出した国王と宰相、そして魔王討伐に参加した女魔法使いのみ。

宰相に促され、国王が震える足取りで真紅の天鷲絨レロードに包まれた“それ”を覗き込む。

最上級の天鷲絨の上に無造作に置かれた漆黒の剣こそ、この度討伐された人間の最大の脅威・魔王の愛剣であった。

夜空の様に艶めく、漆黒の刀身は神秘的な輝きを宿し、柄に嵌められた大粒の琥珀が光を帯びてとろり、と煌めく。

生命を奪う筈の武器であるのに、至上の芸術品の様な麗々しい姿に、国王は魅入られた様に目を奪われた。

「おう、おう。これぞ正しく、あの忌々しい魔王の剣。まるで彼の魔王そのものだ」

「魔王の体は勇者の聖剣に貫かれ灰となりましたが、異形化するまで魔王の使っていたこの魔剣を証拠として回収する事には成功致しました」

「ふうむ。成る程……」

小さく頷きながら、国王が魔剣に触れようと手を伸ばす。

その指が柄に触れるや否や、その手が電撃の様な物によって弾かれた。

「なっ……!」

「ご注意ください、陛下。それはまさに魔王の一部の様な物。我々の手では、触れる事すら許されませぬ」

「忌々しい魔王めが！」

国王が吐き捨てる。

人間族の国王として生まれながらにほぼ全てを手に入れていた彼にとって、大陸に覇を唱える魔王は長年の憎悪と憧憬の対象でもあった。

戦場で数度まみえた、彼の魔性の美貌を持つ王の姿を思い描き、苦々しい気分で齒ざしりする。

そんな王の姿を宰相と女魔法使いはじっと見つめていた。

「怒りを御鎮めくださいませ、国王陛下。この度の異世界出身の勇者の手によって、既に魔王は滅ぼされたのです。それに、ほら——ご覧下さい」

宰相が後ろに控える女魔法使いに目配せをする。

女魔法使いは、部屋の隅に設置された細長い箱を持って来て、魔劍の側へと箱を置き、徐に引き開けた。おもむろ

「それは、勇者の聖劍……」

魔王の劍とはまた違う、白銀の清涼な輝きが国王の目を焼いた。

魔劍と比べると、細身でしなやかな劍。

古の伝承によれば、嘗て魔王と劍を交えた神族の残した物と言われている劍が、魔劍の側に寄せられると、錯覚でもなく魔劍が震えた。

——柄に嵌められた大粒の琥珀が、弱々しい光りに変わる。

「こうして聖劍の側へと置けば、この劍は力を失います。陛下、もう一度御試してください」

「……ふむ。確かに」

象嵌された琥珀へと国王が再び手を伸ばすが、先程の様な衝撃は襲って来なかった。

その事実で満足した国王の顔が緩んだ。

『――失礼致します、国王陛下。勇者様と僧侶様がお見えになられました』

聖剣という威を借りつつも、魔剣を――ひいては魔王を屈服させたという事実で心を奪われていた国王は、外部から扉がノックされる音で我に返った。

名残惜し気に剣を撫でていた手を放し、威厳に満ちた声を出す。

「――許す。入って来るが良い」

「失礼致します」

「失礼します……」

――一礼して、僧侶と勇者が室内へと足を踏み入れた。

勇者凱旋・2（後書き）

人間族の国王陛下の話でした。
魔王様の出番はまだです。

勇者凱旋・3（前書き）

僧侶Ⅱらんぎょく藍玉らんぎょくです。

勇者凱旋・3

——魔族率いる魔王が、秀でた武勇の持ち主であると言うのは周知の事実だ。

実際、過去幾度か起こった数々の対・魔族の戦に於いて、彼の王は時折姿を現し、その武勇を揮っている。

一人間の筆者としても悔しい事に、魔王の武芸は正しく一騎当千の強者と称するに相応しいものだ。

いや、時には千の軍隊どころか、万の軍勢相手に怯む事無く戦いを挑む姿は、敵ながらあっぱれと賞賛する他無い。

人間の猛者相手に、体格では一段どころか二段も劣りそうな華奢な体躯の魔王が、軽々と鎧を纏った騎士を放り飛ばした話など、耳に胼胝が出来る程聞かされた物だ。

……どうにも話が脱線してしまった、話を戻そう。

綺羅星の如く煌めく魔王の武勇伝の中で最も有名な物は、今は既にこの世界を去った神族との一騎打ちだ。

神族の中でも特に武勇に優れ、軍神と謳われた“柘榴のベルメーリヨ”。

千の強者を屠り、万の怪物を降したとされるこの軍神と魔王が戦った場所は、今では深い溪谷となっており、往事の争いの凄まじさを物語る。

——七日七晩続いたとされるこの争いは、軍神の隙を突いた魔王の勝利で幕を下ろしたと伝えられている。

愉快的事に、想像逞しい研究者の中では、この戦いが神族がこの

世界を去った原因となつたのではないかと考えている者がいる程である。

筆者としては、軍神と言えども、たかが一神族に過ぎぬ相手が負けたという一件のみで、神族全体がこの世界から立ち退いたと考えるには暴論が過ぎると考えるが。

補足だが、この軍神“柘榴のベルメーリヨ”が残した剣は後に人間族の作った王国の所有物となり、現在では勇者の聖剣として世に名を知らしめている。

『人から見た魔族に対する一考察 アルマース・シュタインベルツ 著』

第一章 Ⅱ魔王伝説の真偽Ⅱ より抜粋。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「招きに預かり参上致しました。それで、王様。僕に何の御用ですか？」

「済まないな、勇者。英雄である其方呼び出すなどして」

「英雄って、僕はそんな立派な存在では……」

途端に口内でもごもごと言葉にならない言葉を紡ぐ勇者を見てみると、苛々する。

——最も顔には出さないが。

今は勇者一行の一人、僧侶としての姿をしている藍玉は胸中で舌打をした。

今この広い室内にいるのは、藍玉と勇者、国王と宰相そして女魔法使いの五人のみである。

そして藍玉と勇者を呼び出した国王の前に置かれた物体を見て、
苦々しい気分になる。

———魔族の王・魔王の一部とも言える漆黒の御剣。みつるぎ

対極とも言える白銀の輝きを宿した聖剣と対になる様に置かれ、
象嵌されている大粒の琥珀が弱々しく輝いている。

彼の王の腰に佩かれていた時は、他の如何なる宝玉も敵わない程
煌めきを放っていたというのに。

「ところで、勇者に何か御用があったのではありませんか？」

「ああ……。そうだったな」

呼び出した勇者そっちのけで魔剣を見つめていた国王に声をかける。
る。

下位の者が国王に直接声をかけると言う無礼を犯した僧侶姿の藍
玉を宰相が睨むが、素知らぬ顔で無視した。

「勇者、お前が昨夜私に言った願いの事なんだが……」

「元の世界には、還るのは無理なので……しょうか？」

弱々しい響きの少年の声。

こんな餓鬼のために魔族の王である魔王が手を打ってやったと考
えるだけで腹が立つ。

「————その事に関してですが、陛下。少々、お話が」

不意にそれまで押し黙っていた女魔法使いが口を挟む。

むっとした様に宰相が今度は女魔法使いを睨むが、淡々とした表
情のまま、女魔法使いは言葉を続けた。

「私も昨晚知り得たのですが、どうやら＜塔＞の魔法使い達の間で勇者殿の願いを叶える事の出来る術が完成した、と」

人間族の中でも、特に優秀な魔法使いは国家直営の魔法使い管理組織＜塔＞に属して日夜新たな術の研究を進めている。

この度異世界から勇者を召還した術とて、元々は数百年前の術を改良した物であった。

「つまり、異世界送還の術が完成したという事か……？」

「左様でございます、宰相様」

ふるふると勇者の体が小刻みに震える。

未だ青年の領域に届かぬ少年の両手が、控えていた女魔法使いの手を握りしめた。

「ほ、本当なんですか！？ 僕は元の世界に還れるんですか！？」

「そ、その通りです。術は完成しており、今夜にでも発動出来る事の事です」

「よ、良かったあ。ありがとうございます、魔法使いさん！」

無邪気に笑った勇者から顔を背けて、女魔法使いが耳を赤らめる。

「べ、別に貴方を喜ばせるために教えた訳じゃないんですからっ！」

なんだ、この三文芝居。

国王と宰相と言う国のツートップの前で繰り広げられた茶番劇に、藍玉は僧侶としての仮面を忘れて溜め息を吐きたくなった。

勇者凱旋・3（後書き）

ツンデレって難しい。

神族の名前は二文字の色名漢字にカタカナで。

勇者帰還・1

———魔王という呼称が意味する物はなんなのであろうか？

筆者は以前、混血児の集団であった『混族』は、魔王という統率者を得て『魔族』になったと書いた。

“魔”という一文字には、不思議の力、神秘的なもの、恐るべきものに対する畏敬と恐怖、憧憬そして羨望を表す。

その一方で、悪事を為す存在に対して付けられる“魔”という意味も“魔王”と言う呼び名には含められていることから、成る程彼の存在に相応しい呼称とも言える。

少し話は変わるが、魔王が魔王として歴史の表舞台に姿を現したのは、おおよそ一万年程前だとされている。

しかしながら、発掘された古代遺跡から出土した資料から、時折魔王らしき存在についての描写が発見される事もあるため、もしかしたらそれ以上長い時を生きている存在なのかもしれない。

その証拠に、魔族達は自分達が敬愛する魔王の事を「初代であり、永代たる我が王」と呼ぶ事実がある。

この言葉が指しているのは、彼の王が我々人間族の王や精霊族の長老達とも違い、一度も代替わりする事無く魔族を支配し続けている、という驚愕の事実である。

——もしかしたら、我々他種族が知り得ないだけで、魔王は代替わりしているのかもしれないが、それにしても歴史に姿を現す魔王の存在はあまりにも統一され過ぎている。

現在最も長命種である木の精霊族^{エルフ}であっても、寿命は千年程度。

その木の精霊族エルフ以上に長命であったのは、今は去りし神族のみであるが、魔王が神族ではないのは周知の事実である。

となると、彼の王もやはり他の魔族同様、異種族婚によって生まれた存在なのか？

……これは筆者の推論でもあるのだが、魔族率いる魔王は『混族』であった『魔族』を支配する者でありながら、異種族の交わりによってこの世界に生まれ落ちた存在ではないのかもしれない。

ある意味、四種族のどれにも属さぬ第五の種族……かも、しれないのだ。

全て筆者の憶測、いや妄想に過ぎないのだが、こうして調べを進めていく内に、筆者自身、この突拍子の無い考えを否定する事が出来なくなってしまうのが現状である。

———この様な事例も、彼の王を魔王とするに相応しい神秘性の象徴とも言える。

『人から見た魔族に対する一考察 アルマース・シュタインベルツ 著』

第一章 Ⅱ魔王伝説の真偽Ⅱ より抜粋。

＊ ＊ ＊ ＊

「今宵、勇者は元の世界に還られる。皆の者、我が国の、いや世界の英雄を盛大に見送ろうではないか!！」

重厚な響きの国王の声が、豪華絢爛に飾り付けられた大広間全体に広がる。

国王の言葉を受け、それぞれ贅を尽くした衣装を着こなした貴族達が一斉に壇上の勇者一行へと拍手を送った。

鼓膜が割れんばかりの拍手喝采を受け、今晚の宴の主役たる勇者は気圧された様に戦いた。

「勇者様、勇者様」

「おめでとうございます、勇者様。彼の悪名高き魔王を討ち滅ぼして下さって……」

「栄誉ある凱旋式なのですから、もう少々この国に御留まりになって下さっても」

「よろしければ私の娘などは如何です？ 元の世界の事など忘れさせて差し上げますよ」

国王の言葉が終わるや否や、居心地悪そうに身動きしていた勇者に一斉に人々が群がる。

勇者だけでなく、他の魔王討伐の英雄達、弓使いや女魔法使い、果てはまだ子供の盗賊にも貴族達は声をかけていた。

穏やかな笑みで追従の言葉を躲しながら、僧侶に扮している藍玉は失笑を堪え切れなかった。

「僧侶様……。よろしければ今度我が伯爵家にいらしてくださいませぬか？ 是非ともお話を賜りたいのです」

「あら。伯爵家風情が何を仰っているのかしら。英雄たる僧侶様に話しかけるなど、身分を弁えていないのでなくて？」

「ほほ……。そうでございますわ、僧侶様。この度目出度く勇者となられたのです。還俗をお考えにはならないのですか？」

隙あれば自分達との縁故を結ぼうとする人間達を、心の中で嘲笑する。

——ここに居る全員が魔王が討伐されたと信じ込んでいるのだから。

そんな中、一人の貴族が大声を上げた。

「おそれながら、陛下。俄には信じられませぬな。今まで散々我らを苦しめて来た魔王がこんなにもあっけなく滅ぼされたというのは」「剛毅で知られる公爵らしい言分だ。しかし……」

「ああ、一理ある。——本当に彼の魔王は滅ぼされたのだろうか？」

声も高らかに、公爵の一人が懐疑的な口調でそう言い放つと、周囲の貴族達はそれを批判しながらも同意する様に口々に囁きあう。その様子に国王は気分を害する事無く、むしろその言葉を待っていた様に立ち上がった。

「公爵、其方の言う事も最も。しかし余は彼の魔王を勇者達が討ち滅ぼしたと言う確たる証拠を持っておる。——宰相、あれを」

「————はっ」

国王の命を受け、宰相が振り返って部屋の隅に控えていた侍従達へと合図する。

壇上に設置された細長い箱を覆っていた濃紺の布が一斉に剥ぎ取られた。

「おお……………！」

「まさか、まさかあれは……………!?!?」

「魔王の愛剣ではないか!」

ガラスケースの中に設置された漆黒の剣を目にした貴族達が口々

に驚愕の声を上げる。

中でも騎士として過去数度の対・魔族の戦闘に出向いた者達の驚愕はそれの比ではなかった。

「あの漆黒の輝きを忘れはせぬ……！ 初陣の時に目にした魔王の剣そのものだ……！」

「応とも。しかしそうなるト——」

「やはり彼の王は勇者の手で滅ぼされたのか……」

一斉にその場にいる全員の視線が勇者へと集う。

勇者が恥ずかしそうに目を逸らした。

「誠に大儀であった、勇者。其方の働きを我が国は決して忘れないだろう」

「は、はぁ。どうも」

困った様に何度か視線をあちこちに走らせながらも、何かを待っている様子の勇者の姿に国王はその笑みを深くした。

「それでは、勇者。今度は我々が其方の願いを叶える番だ。異世界送還の陣を準備せよ！」

———国王の宣言に、勇者の愁眉が漸く開かれた。

勇者帰還・2

——何故、筆者は魔王第五種族説を考える様になったのか。
それは、この世界に存在する四種族の特徴のどれにも魔王という
存在が当て嵌まらないから、としか答えようが無い。

前述したが、この世界に存在するのは人間族・精霊族・（正確に
は存在した）神族・魔族の四種である。

人間族。

寿命は短くとも、その分繁殖力に長けた種族。

その他の特質として、精霊族の様に特に定まった属性を持たず、
個人の資質によって操る元素が異なる。

精霊族。

世界を構成する第五元素をその身に宿した種族。

木の精霊族^{エルフ}、土の精霊族^{ドワーフ}、火の精霊族^{ドラゴン}、風の精霊族^{シルフ}、水の精霊族^{ウンディーネ}
の五つに分類される。

長寿の種族である一方、それに反比例する様に新生児の出生率は
低い。

人間とは違い、精霊族は元素を一種類しか操れない。例えば、木
の精霊族^{エルフ}であれば木の元素、火の精霊族^{ドラゴン}であれば火の元素など。

神族。

見目麗しい容姿と強大な力を持った長命種。一節には不老不死の
存在であつたらしい。

三千年程前にこの世界より去り、新天地を目指して旅立ったとさ
れている。

それぞれ司る物を持ち、それに則した能力を持っていたと伝えら

れているが詳細は不明である。

魔族。

『混族』と蔑まれていたが魔王と言う支配者を抱いてからはその庇護の元、発展を遂げて来た種族。

寿命、容姿などはそれぞれ自らの元となった種族の特徴を受け継いでいるため、四種族中最もバリエーションに富んでいる。

人間の繁殖力、精霊族の長寿や能力、神族の生命力や見目麗しさ、などといった他種族の長所を受け継いで生まれてくる者が多い。

時には二親の能力を受け継いで生まれてくる者が大多数なため、一人の魔族が二つの元素を宿していることなど標準仕様であり、逆に一元素のみの方が稀であるとか。

そこで、我々の知りうる魔王の情報を統合してみたところ、四種族のどれにも属さぬ存在であると考えの方が容易い。

彼の王の見目の美しさから神族ではないかとも考えられたが、それは神族の行いがそれを否定している。

神族同士の争いは厳格に制限されていたため、軍神であった“柘榴のベルメーリヨ”との一戦は、魔王を神族でないと断定する良い証拠である。

人間族であると考えるには、彼の王の異常なまでの生の長さからして即座に否定が可能だ。

精霊族、又は魔族であると考えるについても、彼の王が精霊族であれば一種しか仕えぬ第五元素を全て操るという時点で却下され、例え、混血の魔族であったとしても扱える元素は最大で三種まで（それ以上を無理に操ろうとすると元素同士の反発で肉体が崩壊すると考えられている）という事実より、彼の王が混血種である魔族ではないと考えるのが妥当だ。

しかし、魔族でもないとしたならば、何故彼の王は魔族の王としてこの世界に存在するのであるのか？ 疑問が尽きることはない。

『人から見た魔族に対する一考察 アルマース・シュタインベルツ 著』

第一章 Ⅱ魔王伝説の真偽Ⅱ より抜粋。

＊ ＊ ＊ ＊

大広間の中央に敷かれた、巨大な円陣。

円陣の中央には勇者の姿があり、円陣の外側には全身を五色の異なる色彩のローブに身を包んだ五人の魔法使い達が立っていた。

韻を踏んだ詠唱を揃って唱え、瞳を閉じてトランス状態へと入る。

——やがて、長かった詠唱が佳境に入った頃、示し合わせた様に魔法使い達が両の手を円陣の中にいる勇者の方へと差し向け、一際大きな声で唱和した。

この世界を構成すると考えられている第五元素が大広間に、正確には勇者を中心とした円陣へと密集していく。

緑、赤、黄、白、青の色を宿した光球が円陣へと吸収され、円陣が明滅を始めると、その時が近い事をその場にいる全員に教える。

——則ち、勇者が自らの世界へと還る瞬間を。

「良かったね、勇者。これで元の世界に帰れるんだ……」

「ああ。あいつ、散々還りたがっていたからな」

魔王討伐の英雄である盗賊と弓使いが感慨深気に呟き合う。

それに特に心動かされる事なく、藍玉は円陣の中で光りに包まれる勇者の姿をただ見つめ続けた。

円陣から発せられる光の明度が、徐々に上がっていく。
来るべき瞬間に備え、その場にいる誰もが目を瞑った。

「……………っ!!」

「きゃあっ!!」

「うお!!」

瞼を通して真っ白な輝きが視界を焼き尽くす。

……………光が消え失せた後、輝きを失った円陣の中央に勇者の姿は無かった。

こうして、異世界より召還された勇者は、彼のあるべき世界へと帰還したのであった。

勇者帰還・2（後書き）

これにて勇者帰還終了。
次は魔王暗躍です。

魔王暗躍・1 (前書き)

漸く、魔王様のターンです。

魔王暗躍・1

「勇者、還っちゃったんだね……」

「ああ。そのようだな」

僅かに涙ぐんでいるらしい盗賊と弓使いの言葉に尻目に、藍玉は未だ明滅を繰り返す視界を必死に凝らして、大広間を見渡した。

すっかり輝きを失った円陣に、それを囲む様にして立っている五人の魔法使い達。

一際高い所に設置された壇上の玉座には国王が座したままで、その脇には宰相が控えている。

そして彼らの前に置かれた細長いガラスケースの中には、大粒の琥珀が象嵌された漆黒の剣が深沈たる輝きを宿したまま鎮座していた。

「勇者殿は御還りになられた！ 皆の者、再度我が国の英雄達に感謝の拍手をしようではないか！！」

壇上の国王が何かを叫んでいるが、どうでもいい。

藍玉はただ一人を探して、視線を彷徨わせ続けた。

——そして。

「おい、僧侶殿。どうしたんだ、さっきからぼんやりして」

「……………いえ、何でもございませんよ」

横から弓使いが心配そうに声をかけて来るが、適当に受け流す。彼の眼差しは、ただ一人に釘付けだった。

勇者の事にとっても拘っていたから来ているだろうと思ってはいたが、本当に来ていたとは。

見慣れない姿だが、強い既視感を覚えた相手。

十歳前後の背格好に、白のヘッドドレスを被った後姿。

地味な色合いの茶色の給仕服に白のエプロンドレスという格好だが、自分が見間違える筈が無い。

唯じっと見つめていると、相手が自然な動作で振り返る。

——一瞬だけ向けられた琥珀色の輝きと藍玉の視線が交錯する。

直ぐさまそれは反らされたが、藍玉にはそれだけで充分だった。

「——後は貴方の思うがままに、我らが魔王陛下」

口中で呟いた言葉は誰の耳にも届く事無く、ゆっくりと大広間のざわめきの中に沈んでいった。

＊ ＊ ＊

——宴は大成功としか言いようが無かった。

その晩、いい具合にほろ酔い加減となった国王は、上機嫌な気分のまま自室へと戻った。

長年の頭痛の種であり、人間族に取っては建国の時から目の上のたんこぶであった魔王が漸く滅ぼされたのだ。

——この夜は国王に取って、まさに人生最良の日であった。

人はとっくの昔に下がらせており、国王の自室には彼しかない。寢室のサイドテーブルに保管しておいた秘蔵の美酒を取り出して、

瑠璃の盃にたっぷり注ぐ。

このまま眠ってしまうには非常に持たないと言おうと国王が思った程、彼の気分は良かったのだ。

微かな甘みのある酒を口に含んで、ゆっくりと飲み干す。

強いアルコールが喉を焼いた。

――さて、これからあの忌々しい魔王を失った魔族共をどうしてくれようか。

精霊族のいずれかと盟約を結び、このまま一気に軍を進めて、魔王を失って混乱している魔族共を一息に蹴散らすもよし。

あの魔族の広大な領土を併合し、大陸一の大国として周囲に覇を唱えるもよし。

あの厄介な魔王さえいなければ、魔王に寄生していた魔族共など恐るるにたらず。

どうとでも、それこそ国王の思うがままに料理出来るというものだ。

抑え切れない笑いが、唇を割って外に零れる。

低い笑声が空気を振るわす中、過去に数度目にした魔王の姿が国王の脳裏に描き出された。

何度、あの魔王を自らの足下に跪かせたいと思った事か。

何度、あの太々しい笑みを浮かべる王の顔を屈辱で歪ませてやりたいと思った事か。

光を吸い込む様な長い黒髪に、不思議な輝きを宿す琥珀色の瞳。男とも女とも判別出来ぬ魔性の美貌を持った麗しき魔王。

あの姿を今後見られぬと思うと、それはそれで勿体無い様な気がしたが、建国当初からの人間族の積年の相手を葬る事に成功したのだ、これ以上を望めば罰当たりになるだろう。

火照った頭でそんな事を考えていた国王の頬を、柔らかな風がくすぐった。

風に頬を撫でられ、あまり回らぬ頭でぼんやりと考える。

……自分が部屋に入る前に、窓を開けただろうか。

————国王がそう思った途端、室内の明かりが一斉に落され、周囲が闇に染まった。

魔王暗躍・1（後書き）

なんか国王がヤンデレ化しそうな予感……。

魔王暗躍・2（前書き）

『魔王陛下』をお気に入り登録してくださって感謝します。

魔王暗躍・2

室内を突風でも吹き抜けた様に、部屋の中を照らしていた明かりが掻き消える。

真っ暗になった室内で、国王は座していた椅子より立ち上がり、従者を呼ぼうと口を開けた。

———しかし。

「——おっと。人を呼ばれては困るな」

一陣の風が頬を掠めたかと思うと、次の瞬間には床へと叩き付けられていた。

——いや。

不意に現れた何者かに寄って足払いをかけられ、胸元を強く押された事で床へと押し付けられたのだ。

「なっ、何者だ！ 余を国王と知っての狼藉か！？」

「——そりゃそうだとも。会いたかったぜ、人間族の国王」

くすくす、と自分を床へと押し付ける何者かが、笑う。

笑みを含んだ、幼さの残る声。どこかで———聞いた事が無かったか。

室内は暗闇に寄って包まれ、自分に狼藉を働く輩の顔を見る事すら敵わぬ状況の中、国王は必死に頭を回転させる。

その瞬間、闇の中でとろりとした輝きを宿す極上の琥珀が瞬いた事に気付いて、愕然とした。

「きつ、貴様!! 貴様はよもや、魔王………!!?」

「応とも。なんていうんだっけ、こういう時。地獄の底からやって来たぜ? と言ったところかね」

くっくくく、と喉が鳴る音に、国王の血の気が引いていく。

「馬鹿な! 貴様は勇者の手に寄って討ち滅ぼされたのではなかったのか!?」

「おっと、あまり大きな声を出すんじゃない。オレが生きていると知られて困るのは……どっちだ?」

ぐっ、と喉を冷たい手で圧迫され、声を抑えつけられる。

国王が静かになったのを確認した後、死んだ筈の魔王は再び口を開いた。

「そう、オレが死んだと発表したにもかかわらず、オレに生きていられたら困るのは他でもない、お前達だよな? だったら大人しくしておけ。オレはお前を殺しに来た訳じゃないからな」

勇者が去った今となっては、魔王を討ち滅ぼしたと宣言した己の国が各国から非難され、国としての信頼を失う事は間違いない。

俄に、喉にかかる圧力が弱まり、国王は咳き込んだ。

「オレの要求は只一つ。———オレの大事な子供達に手を出すな。ただそれだけだ」

「子供……魔族共の事か」

「大方、オレがいなくなったという事でオレの国に手を出そうとか考えていたみたいだからな。釘を刺しに来た」

国王の目が段々闇に慣れて来た事で、視界が明瞭になっていく。至近距離で輝く琥珀の瞳は、獣の様に爛々と輝いて国王を見据えていた。

「それさえ守ってくれば、オレも何もしない。魔王が倒れたと広めたいのならば、広めればいい。倒された様なフリをしたのは確かだからな」

「つまり。今回の異世界出身の勇者の功績は勇者の自作自演であったのか？」

「違うって。オレがああの可哀想な坊やに倒されてやっただけだよ」

この世界より去った勇者の姿を思い起こし、国王が低く呻くと、魔王は呆れた様な声を出した。

「魔王」

「なんだ？」

「……貴様、その姿はなんとした」

「あ。バレた？」

闇に慣れた国王の両目が映したのは、確かに魔王の特徴である光を吸う様な黒髪に宝石の様な琥珀色の双眸であったが、かつて数度目にした魔王の姿と違っていた。

腰までであった、光を吸い込む様な黒髪は肩までの長さに。

鋭さを帯びた琥珀色の双眸は、色は変わらぬものの丸さを帯び。

男とも女とも分からぬ魔性の美貌に浮かぶのは、美しさよりも可愛らしさの方が強い。

「働き過ぎた副作用って、どこかね？ 勇者のやった事も、あなが

ち無駄ではなかったってことさ」

———魔王は弱体化している。

その事実が国王の脳裏を駆け巡る。

そうして国王が思ったのは、この状態の魔王ならば、もしかしたら自分の手で止めをさせるのではないのか——というある種の甘美なる誘惑。

そろり、と国王の手が隠し持っている懐剣へと伸びる——前に、小さな手に掴まれた。

「おっと。命が惜しかったら余計な真似をするんじゃない。オレが素手で人間の喉位潰せるのは知っているだろう……？」

「ぐっ!!！」

ぎりぎり、と小さな手に似つかぬ怪力で手首を締め付けられ、国王が痛みに唸る。

以前、魔族の女性相手に乱暴を働こうとして腕をねじ切られた人間族の兵士の姿が脳裏を横切る。

「……そう、いい子だ。大人しくしてろよ、人の国王」

低い笑声に、背筋に戦慄が走る。

生まれながらに四種族の一つ・人間族の王として守られて来た国王には縁遠かった、死への恐怖が国王を襲う。

目の前の、子供の姿となった美しい怪物は自分を簡単に殺す事が出来るのだ。

———畏れずには、いられなかった。

「余を……殺すつもりか？」

「は？ んな、面倒な事を誰がするかよ。お前が戦勝式の翌日に殺されてみる。とぼっちりがオレの大事な子供達に行くにだろうが」

国王の震えた声の問いに、馬鹿馬鹿しいと肩をすくめると魔王は身じろいだ。

「——警告はしたからな。余計な真似を済んじゃねーぞ」

最後に低く、低く宣言すると、国王の上にかかっていた魔王の重みが無くなる。

圧迫感から解放された国王が部屋を見渡した時には、小さな魔王の姿は消え失せていた。

魔王帰還

闇夜に浮かぶのは、仄かな橙色の燈火を灯す白亜の城。

世界の四種族のうち、人間族の王の住まう、鉄壁の防御を誇ると謳われているその城内。

夜空に浮かぶ真円なる満月とその周囲に散らばる銀の真砂の様な星が照らし出す下、踊る様に歩を進める小さな人影があった。

とん、とりズミカルに白亜の床を踏んで、軽やかに飛び上がる。
ゆうるり、と質素な作りの服に身を包んだ手が伸びて、空を切る。
くるり、とステップを踏むと後ろへと優雅に回ってみせる。

白のヘッドドレスこそないものの、服は正しくこの城で働くメイドの物。

簡素な作りの茶色の給仕服と真っ白なエプロンドレスが、人影が舞う度に軽やかに揺れる。

「————ご機嫌ですね、魔王陛下」

「やあ、藍玉。お前は不機嫌だな」

舞台上で観客を魅せる踊り子の様に、月下の下で舞う人影に声をかけたのは不機嫌そうな僧侶。

しかし、眼鏡を外してやや乱暴に髪を梳くと、整った顔立ちながらも何処か地味な雰囲気の青年の姿は、銀の混じった灰色の髪に冷たい光を宿した藍色の瞳を持つ伶俐な美貌の青年へと姿を変える。

「ふふふ。これでとにかくオレのすべき仕事は終わったなあ、と思うと、それだけで心が浮き立つというものだ」

舞を止めた、全てが完璧に形作られた美の極致の様な爪先が、ゆっくりと空を掴む。

実体のない何かを掴もうとする様なその動きに、それまでじっと見守っていた藍玉が溜め息を吐いた。

「何を恍けた事を言っているのですか。魔王陛下、貴方は勇者が来るからと言って全て後回しにしていた書類の束がどれほどあると思っておられるのですか？」

「……………え？」

きよとん、と子供ながらも魔性の美貌を宿す面差しが驚きに包まれる。

「少なくとも、今現在の陛下の身長を超える程度の書類の束は山ほどあります。……………どうやらお忘れだったようで」

「うっそ！ なにそれ、オレ聞いてない！？」

「初代にして永代たる我らが魔王陛下の事ですから、すでにご存知であったかと思っておりましたが、私の連絡ミスのようなのですね。うっかりお伝えするのを忘れたようです」

につこり、と目だけが微笑んでいない笑みを藍玉が浮かべると、魔王は大袈裟な動きで頭を抱え込んだ。

「うっかり……………って。お前、そんなキャラじゃないだろうが……………」

——完全に勇者の件を根に持っているな」

「何かおっしゃいましたか、魔王陛下？」

「いや、なにも。……………昔はあんなに素直で可愛かったのになあ」

唇を尖らせ、完璧に拗ねた子供用な仕草をしている魔王は魔族の中で最も長寿な存在である。

そのため、現・魔族の誰もの幼い頃の姿を見知っていた。

『――陛下』

「塔へと侵入させておいた子供達か。頼んでおいた術式破棄は叶ったか？」

『当然です。異世界召還の術並びに帰還の術、全て破壊致しました』
「ご苦勞様。さすがはオレの自慢の子供達だ」

周囲に誰もいないにも関わらず、二人に――厳密には魔王へと――声かけられる。

夜の風に紛れてしまいそうな忍び声の持ち主を、魔王が弾んだ声で賞賛する。

愛しさの滲んだ声で誉められ、姿の見えぬ声の主が照れた様に沈黙した。

「さーて。第二の異世界産勇者が誕生しない様に手は打ったし、なんか藍玉は怖いし、オレもそろそろ城に帰るとするか」

「人間族の国王はあのままでよろしいのですか？」

「まあ、いいんじゃない？ わざわざおっぴらにして、盛大に恥をかく様な趣味は持っていないだろうし」

心底どうでも良さそうに、魔王がひらひらと手を振る。

尚も言い募ろうとする藍玉を琥珀の視線で制すると、魔王は藍玉へと小さな手を伸ばした。

「――――そら」

「……なんですか、この手は」

「飛んで帰るんだろ？ オレも連れてけ」

「失礼ながら、陛下は空を飛ぶ術を習得している筈では？」

「勇者に倒されてやった副作用で満足に力を使えないんだよ」

はぁ、とわざとらしい溜め息を吐いて、藍玉が子供姿の魔王を抱え上げた。

魔王帰還（後書き）

これより第三部になります。

「魔王城の新たな日常」へと移ります。

お披露目（前書き）

新章の開始です。ようやくここまで来ました……！

お披露目

奇形の鳥が飛び交い、暗雲渦巻く暗黒の城——魔王城。

異世界より魔王討伐のために呼び出された勇者が訪れた際には、おどろおどろしい姿を見せていた彼の魔王の城は、勇者が去った後、その姿を一変させていた。

濁った闇色であった城壁は、深い藍色がかった晴れ渡った夜空の色へ。

どんよりと立ち籠めていた重たい雲は消え去り、むしろ清涼な風が城内から流れ出している。

飛び交っていた奇形の鳥達は、どこからどう見ても無害な小鳥へと様変わりしていた。

人間族が誇る鉄壁の防御の白亜の城と同じ、いや、それよりも遙かに巨大で壮麗な夜色の王城。

——それが本来の魔王城の姿であった。

＊ ＊ ＊ ＊

すっかり元の壮麗な姿を取り戻した魔王城内、その奥の奥、深部の深部。

勇者との最終決戦の場となった魔王の謁見の間にて集まった城内の魔族全員を前に、魔王補佐である藍玉は冷えきった声音で言い放った。

「——こちらが、我らが王であらせられる魔王陛下の現在の姿でございます」

見る者を威圧する様な漆黒の玉座に座して、少々居心地悪そうに縮こまるのは小さな人影。

肩までの光を吸い込む様な黒髪と深沈たる輝きを宿した琥珀の瞳。黒を基調に金糸や銀糸をふんだんに使用した華麗なる衣装に身を包んだ、男とも女とも判断出来ぬ中性的な容姿。

一歩間違えれば派手と思わせてしまう衣装を見事に着こなし、それでいて決して負ける事の無い魔性の美貌の持ち主。

——言わずもがな、魔族を統べる唯一つの存在である魔王であつた。

「あー。その、済まん。ちょっと勇者と戦った際に力を使い過ぎた……」

居心地悪そうに玉座の上で身じろぎしながら、魔王は正面で跪く魔族達へと弁解する様に呟いた。

その脇に佇んでいる藍玉は常の如く無表情を保ったまま、固まっている同胞共へと声をかけた。

「——因みにドッキリとかではありませんので、あしからず」

藍玉がそう告げると、固まっていた魔族達の間から悲鳴が上がつた。

「そ、そんなっ！　我らが魔王陛下が子供のお姿になられただなんて……！」

「ちょっと待て！　幾ら陛下が色々と規格外だとしても幼児化するとは……！　実は陛下の隠し子ではないのか！」

「ああ、でも、あのお姿は正しく魔王陛下のものではないか……！」

「うわあ。着飾らせてみたい……かも」

魔王城に務める老若男女が各々好き勝手囁き合う中、十歳前後の子供姿の魔王が玉座から立ち上がる。――途端にその場にいた誰もが口を閉ざし、ざわめきが収まった。

「えー、その、今のオレの姿を見て魔王と納得し難い者も多いだろうが、こんなナリでも魔王だからな。隠し子とかでもないし、正真正銘、お前らが知る魔王で間違つとらんぞ」

そこで一旦、魔王が口を閉ざす。

「この姿は力を使い過ぎた副作用みたいなものだから、また時間をかければ元の姿に戻る。だから、それまでこの姿のままて頼むよ、オレの可愛い子供達？」

巫山戯た口調ながら、跪く魔族達に呼びかける声には確かな信頼と慈愛が込められていて、それは今までの魔王の話し方と全くと言っていい程同じであったがために、魔族達はそれ以上何も言う事無く万感の思いを持って一斉に頭を下げたのであった。

魔王城の人々

———お披露目も無事に終え、所変わってここは魔王の執務室。普段は限られた者にしか出入りの許されない、魔王城の『心臓』とでも言うべき場所に彼らはいた。

「ううっ……。あ、あたくしの、あたくし達の魔王陛下が、陛下があゝっ。あの凛々しくもお美しいお姿から、お可愛らしくもこの様な姿になれるとは……おのれ、勇者っ！ 断じて許すまじっ！！」「しかしのう。当の勇者本人はとっくの昔に異界に還られたようじやて。許すも何も、何をしでかすつもりじゃ？」

「でもさゝ、陛下が本気出せば、例え異界出身だったとしても勇者なんてイチコロだったんじゃない？ それこそ、これまでの馬鹿勇者達みたいになさ」

惜しむ事無く最上の物のみで構成された魔王の執務室内にいるのは、黙々と書類仕事に勤しむ魔王補佐・藍玉と困った様な表情の魔王と他三名。

彼らは魔王の配下にて、魔王治めるこの国の『行政』『軍事』『司法』を司る三名の魔族だ。

まず、切々と勇者に向けて恨み言を吐き続けているのは、行政を担う文官筆頭・朱炎^{しゅえん}。

燃え立つ様な朱色の髪を豪奢に結い上げ、翡翠の髪飾りで留めている。

やや吊り気味の明るい若葉色の瞳に、険のある美貌と成熟した蠱惑的な肢体を持つ美女である。

隣で朱炎を宥めているのは、司法を司る判官筆頭・蒼氷。

肩より少し長い程度の群青色の癖のある巻き毛に固く閉ざされた両の瞼。

老人の様なゆったりとした喋り方に反し、その見た目は十五歳程度の少年である。

すっ、と通った鼻梁と髪の色から冷たい印象を抱かれがちだが、見目に反してその表情は柔らかい。

最後に語尾を伸ばしながら魔王を見やったのは、軍部を掌握する武官筆頭・緋晶。

濃い金髪に緋色の瞳が特徴的な背の高い青年で、笑みを浮かべているものの、その眼差しは何処か責める様に魔王を見つめている。

武官らしく動きやすい服をだらしく見えない程度に着崩した不真面目そのものの姿だが、彼が身動きをしても服に付いている貴金屬や腕輪の類が音を立てたりしないのは、彼の鍛錬の成果ともいえた。

「取り敢えず泣き止んでくれ、朱炎。お前がオレの事を思ってくれるのは分かるが、勇者を恨むのは……筋違いだ」
「陛下……」

朱炎の潤んでいる目元に、絹のハンカチを当ててそっと涙を拭う。頬を薔薇色に染め、豊かな胸元に手を当てている姿は、まるで恋する乙女のように。

魔族の子供達の大部分の初恋は魔王であるため、朱炎の場合もその例に漏れず子供の頃からの憧れの人に慰められ、幸せそうだ。

——最も、今の子供姿の魔王では普段は勝ち気な姉を慰める弟または妹……にしか見えないのだが。

「それから、緋晶。責める様にオレを見るのをやめてくれ。なんか居心地が悪いぞ」

「はいはい。俺は別に責めてなんかいませんけどねー」

「よっぽど勇者相手に腕比べを出来なかったのが悔しかったようじやな。大人げないぞ、緋晶」

「うるさいよ、蒼氷のじい様。俺達の中でも陛下に次に長生きなじい様にだけには、言われたくないですよー」

窘められ、わざとらしく首を竦めた緋晶に、蒼氷が苦笑する。

木の精霊族に次いで長寿で知られる魔族の中でも、魔王を除いた中で最も長生きな彼は、今年で1500歳近くになる魔族であった。

「――陛下。無駄話をしている暇がありましたら、少しでも口の代わりに手を動かして頂けませんか？書類は未だ山の様に積まれています故」

わいわいと騒ぐ面々をぎろり、と睨んだのは魔王補佐である藍玉だ。

徐々に騒々しさを増していく面々に苛立ちを覚えているのか、米神に青筋が浮かんでいた。

「……そうだな。それでは、目的を果たしてもらおうとするか」

魔王が軽く溜め息を吐いて、朱炎の目元から魔王の手が離れる。

それにやや残念そうな表情を浮かべた後、朱炎は俄に視線を鋭い物へと変えた。

世界情勢（前書き）

まあ、一気にパワーバランスが崩れた訳ですから。

世界情勢

「人間族の王が魔王討伐に成功したと公式に発表してからほぼ一両日経ちますが、今の所、他種族の国家間に大きな動きはございません」

厳しい顔付きのまま、朱炎が滔々と述べる。それに魔王は小さく頷いて、続きを促した。

「どちらかと言うと、未だに半信半疑と言った具合ですかのう。人間族の王の言う事を本気で信じてても良いのか、それともこれも魔族の嘘で、実は魔王は生きているのではないか……と疑って身動きの取れない者が大多数のようです」

「ま。実際に我らが魔王陛下はこうして俺達の前にいる訳だしね」

真面目に蒼氷が続ければ、緋晶が囁く。

「しかし、念のためにオレの剣は人間族の城に置いておいたのだが……。それでも、信じられんと?」

魔王討伐の最も信憑性のある証拠として、あの愛剣を白亜の城から回収せずに置いたのだが、随分と疑り深いものだ。

「いえ、現に最も我々を目の敵にしている木の精霊族エルフなどは、彼らの領土内で今にも魔族に対して戦端を開こうとする者ともう少し様子を見るべきだと主張する者で二分されているそうです。実際、開戦派の者達は陛下が滅ぼされた証拠として魔剣の存在を述べているようですし」

「その一方で、人間族の王が家来達にせっつかれても中々重い腰を

上げない事も、魔王生存説に拍車をかけておりますわ」
「なるほど、ね」

藍玉と朱炎が口々に言い募ると、魔王はにんまりと口角を吊り上げた。

「ま。当分の間、対・木の精霊族^{エルフ}用に警戒態勢を取っておくだけで充分だろ。あの保守派共は口論に百年かけられるほど、気の長い種族だからな」

「――御意。人間族は放っておいても良いのですか？」

「問題ない。いざ、向こうが戦端を開きかけたら、あの剣を取り戻せば良いからな」

そうなれば、あの白亜の城の住人達は混乱の渦に突き落とされる事となるだろう。

「木の精霊族^{エルフ}対策はそれでいいとして、他の精霊族はどうします？」
^{ドラゴン}

「守銭奴共は放っておいて構わんじやろ。何かあれば、奴らの住む火山に金塊でも撒けば、暫く我らの事など忘れるじやろうて」

「くくっ……。精霊族の中でも最強と言われる火の精霊族^{ドラゴン}相手にそれはないでしょ、蒼氷のじい様。確かに光り物好きなあいつらには最適の手段だけどさ」

「薄情者の風の精霊族^{シルフ}達は元より世俗に興味が無い。奴らの邪魔をしなければこちらに手を出して来ないだろうだろうよ」

「薄情者……。まあ、たしかに陛下の仰る通りですわね。土の精霊^{ドワ}族^{ウンディーネ}達と水の精霊族^{ウンディーネ}は如何致します？」

「水と土の精霊族に至っては気にかけるに値しませんよ、朱炎。所詮、器用貧乏^{ドワーフ}と自己中^{ウンディーネ}ですからね」

書類を捲りながら、藍玉が会話を締める。

そうして彼らは姿は幼子でも敬愛する王の方へと振り向いた。

「となると、やはり第一に気をつけるべきは木の精霊族^{エルフ}だけだな。念のためだ、魔王が倒れたと積極的にオレ達の方から噂をばらまいてやれ」

「了解しましたー、陛下。それで奴らが疑心暗鬼に陥って、内部崩壊でもしてくれれば願ったり叶ったりだと思いませんか？」

軽い口調ながら、その内には鋭い毒と棘が潜んでいる。

普段から、魔族の事を『混ざり者』と呼んで蔑んでいる、木の精^エ霊族相手に好感を持っている魔族を探すのは難しいだろう。

今執務内にいるメンバーの中でも、前線に立つ機会の多い緋晶はその傾向が顕著だ。

腕を振って、これ以上この話を続ける気はないと行動で示す。

彼らが口を噤んだ後、魔王は囁く様な声で呟いた。

「――オレがこんな姿になった事で面倒をかけると思うが、これからもよろしく頼むよ」

静かになった執務室内に、魔王の声が思いの外響き、誰かが息の飲む。

慈愛と感謝の込められた幼い響きの声に、魔王配下の魔族達はその場で跪いて彼らの王に向けて一礼したのであった。

世界情勢（後書き）

木の精霊族^{エルフ} || 保守派
火の精霊族^{ドラゴン} || 守銭奴
風の精霊族^{シルフ} || 薄情者
土の精霊族^{ドワーフ} || 器用貧乏
水の精霊族^{ウンデイナー} || 自己中

——身も蓋も無い種族的特徴でした。

書類、書類、また書類（前書き）

お気に入り百件登録感謝します！

書類、書類、また書類

右を向いても、書類。

左を向いても、書類。

背後を振り返ってみても、書類。

だからといって前を見据えても、書類を持った側近が立っているだけだった。

「もういやだー！！！」

勇者も去り、魔王のお披露目もすみ、今後の計画も練り終わった平和な午後の魔王城。

魔王城の「心臓」ともいえる魔王の執務室の中で、うんざりした声が上がった。

「もうやだ、もうやだ、書類仕事ばかりなんて、もう飽きたっ！！！」

「口を動かさずに手を動かしてください、陛下」

「動かしとるわ、さっきから！」

がりがり、と紙を削る様な音を立てながら、羽根ペンが書類の上を滑る。

勇者がやってくるのに合わせて後回しにしていた仕事で、大量の書類の束となって魔王を取り囲んでいる現状、どんなにいやでも魔王は仕事をせねばならなかった。

「そもそも。そんなに仕事が嫌だったのですしたら、今までの勇者同様、異世界出身の勇者も返り討ちにすれば良かったではありませんか。それを下手な情けなど掛けて、あんな小細工などをしでかすも

のだから後々忙しくなるのですよ」

「うるさいぞ、藍玉。オレを罵るか、仕事するかの、どっちかにしておけ」

ぎろり、と琥珀の双眸が藍玉を睨む。

子供の姿をしている割に中々迫力のある睨みにも、藍玉は動じる事無く、魔王の署名が済まされた書類の整理を素知らぬ顔でしていた。

「あー、つまらん。書類もこんなにあると流石に憂鬱だな。なんか面白い事は無いのか？」

「ついこの間まで、対・勇者用とか言っていて好き勝手していたくせに……」

ぶつぶつと藍玉が呟くが、済ました顔でスルーする。

何千年も生きていたら、時偶馬鹿をやりたくなる時が来るだろう。魔王に取って、今回の勇者襲撃は滅多に無い娯楽であり、今までに無い程にハマった遊びでもあった。

「あーあ。勇者がまだいた頃は良かったなあ……。勇者にバレない様にと色々と策を巡らせて、時々勇者をからかって。岩人形ゴーレムで怪物を作って勇者を襲撃させたりして」

間違っても勇者を殺さない様、絶妙の匙加減で岩人形ゴーレムを精製して。あれほど刺激のある暇つぶしは今までにもあまり無かっただろう。

「勇者に同情したと仰っていた割には、彼を弄って遊んでいた様に聞こえますが？」

「同情もしてたから、倒されたフリをしてやったんだろ？」

ふう、と可愛らしい溜め息を吐いて、書類の山を琥珀の瞳で睨む。中々減る様子を見せない書類の山の上から、一枚とって流し読む。書かれていた内容に、魔王の柳眉がよった。

「おい、藍玉。これは間違いじゃないのか？」

「――は？ おや、どうやらそのようですね。警察……緋晶宛のものですから、後で彼に渡しておくでしょう」

武官である緋晶は軍事以外にも、治安維持の役割を担う警察機関の長でもある。

この書類の内容は、どちらかと言えば警吏向けであるため、その長である緋晶に渡すのが自然な成り行きであった。

「いや、待て」

「陛下？」

「折角オレの所に来た書類だ。ここはオレが何とかしてやるのが筋というもの」

――ひらひら、と愉快そうに書類を揺らしながら魔王陛下は呟いた。

書状

初代にして永代たる魔王の治める魔族の国は、夜空色の魔王城を中心に、蜘蛛の巣状に魔族達が住む魔族の街が存在する。

八本の街道とそれに添う形の城下町。

今回、魔王の書類の中に紛れ込んでいた書状は、人間族の王国に近い街に住む女性が出した物であった。

＊ ＊ ＊

「魔王陛下、今ならまだ間に合います。直ちに書状は緋晶ひしょうに任せて、今すぐ城に帰りましょう」

「そうイライラするな、藍玉いんぎょく。ただ話を聞くだけじゃないか」

書状の差出人の女性と待ち合わせしていた喫茶店で、藍玉と隣り合わせに座りながら、今は幼子の姿の魔王は足をぶらぶらと揺らした。

「……城にはまだまだ書類が堪っておりますが？」

「嫌な事を思い出させるな。ちよつとした気晴らしだ」

赤と茶色の制服を着込んだウェイトレスが、不思議そうに並んで座る二人を見つめながら、横を通り過ぎる。

二人共すっぽりと顔を隠す様なフードを被り、特に何も注文する事もなくただ席についているのだから、不審に思われてもしようがないだろう。

「おや。どうやら書状の主が来た様だぞ」

カラン、と高い鈴の音が響き、木製の扉を押し開けて店内に新たな客が入って来る。

肩まで垂らす栗色の髪を白のリボンで結んだ、焦げ茶色の瞳の可愛らしい雰囲気の女性だ。

きよろきよろと店内を見渡しながら入って来た女性に、魔王が立ち上がって右手を振ると、ホッとした様子で駆け寄って来た。

「す、すみません。遅れた様で……。念のため、合い言葉を確認しても良いですか？」

「構わないとも。――保守派、頑固者で石頭ときたら……？」

「えっと、木の精霊族エルフですね、お役人様！」

「……木の精霊族エルフが聞いたら今にも攻め込んできそうな言葉ですね」

きよあきやあ、とはしゃぎあう二人を見つめながら、藍玉がフードの下でボソリと呟く。

幸いにしても誰の耳にも届かなかった様だ。

「サファイア嬢で、お間違いありませんか？」

「いいえ、お役人様。確かに私の名はサファイアでしたが、今はもう違います。あの人と共にこの地で生きる事を決めた今となっては、その名はもはや過去の物」

魔王とはしゃぎあっていた女性が、藍玉の言葉に毅然とした態度で首を振る。

それまでの何処か可愛らしさの強かった顔が、その言葉を発した途端、凜としたものとなった。

「ふふ……。オレの部下が失礼したな。失敬、それでは魔族の名で呼ぶとしよう。構わないか、青蘭嬢せいらん」

「ええ、勿論です」

にっこりと微笑んだ女性に、魔王が愛おしそうな顔を見せる。
それに気付いて、藍玉がコホンと空咳を上げた。

「ところで、青蘭嬢。旦那とは上手くいっているみたいだな」

「まあ、お役人様！ 主人をご存知ですの？」

向かい合う様にして席に着き、他愛のない話を二言三言済ました後、さり気なく魔王が口火を切る。

「ああ。一時期、オレの職場でも話題になったからな。あのヘタレがようやく思い人と結婚出来たと」

「恥ずかしながら、求婚は私からでしたの」
プロポーズ

きゃ、と頬を赤らめながらの女性の言葉に、それは良い事を聞いたと言わんばかりに魔王が口角を持ち上げ、藍玉はヘタレめ……と声に出さずに呟いた。

「人間族の女性として生きていた貴方が、何もかもを捨ててそれでもあのヘタレの手を取ってくれて本当に嬉しく思う。この国にはもう慣れたかな？」

「はい……。愛する人と一生を共にする事が出来る喜びもございましたが、同時に何もかも知らない世界で上手く生きていけるかどうか不安でしたけど、皆様優しくて……本当に幸せです」

そう言うってにはかむ青蘭嬢、つまりサフィアは、元は人間族の王国に住む一介の村娘であった。

しかしながら、何の運命の因果か村を訪れた魔族の男性と恋に落ち、周囲の反対を押し切って駆け落ちした女性でもある。

こうして異種族恋愛の典型的パターンのような物語を経て、つい三ヶ月前に今の旦那と彼女は結婚した。

「本当に、今までにない程幸せなのですが……」

幸福で輝いていた女性の顔が曇る。

卓の上に置かれていた青蘭の手が小刻みに震え、表情に怯えの色が混ざった。

「ここ最近、何か可笑しいのです。――外に出る度に、視線を感じて」

そつと魔王が、震える青蘭の手の甲に自身の手を乗せる。

他人の温もりに、安堵するかのように青蘭の体から強張りが抜けた。

「家には、私宛に変な手紙が届くし、もうなにがなんなのやら……！」

「ヘタレ……じゃなかった、旦那にはこの事は？」

「主人は今、大事な仕事に取りかかっている話せないのです。それに、あの人の負担になる様な事はしたくなくて」

魔王が藍玉に目配せをする。

「それで養母^{はは}に相談してみても、妊娠のせいで気が立っているだけじゃないかと言われるだけで……でも！」

蚊の鳴くような声で、青蘭が囁く。

「……気のせいじゃないんです。もう私怖くて、怖くて……！」

ふるふる、と子兔の様に震える青蘭を魔王は抱きしめると、宥める様に背中を叩く。

心音と同じ早さで叩かれる単調な刺激に、抱きしめられている青蘭の震えが徐々に収まってくる。

「――…そう、良い子だ。ゆっくり息を吸って、そう吐いて。…落ち着いたか？」

「ええ…。本当にすみません。お見苦しい所をお見せ致しました」

僅かに潤んだ眼差しのまま、にっこりと青蘭が微笑む。

フードの下から微笑み返して、魔王は青蘭から離れ、元の席に着いた。

「お腹に子がいるのだろうか？　あまり無茶はしない方がいい」

「ええ。そうですね…」

まだそんなに膨らんではないが、確かに自分以外の命が宿っている腹部を愛おしそうに優しく撫でる。

「それにしても、魔族の方々は年齢と外見がそぐわぬ方が多いとお聞きしていましたが、お役人様もそうなのですか？」

「ああ。今は子供の姿だが、こう見えて青蘭嬢よりも、この男よりも年上だぞ」

くい、と隣の藍玉を指し示して、魔王が軽口を叩く。
くすくす、と青蘭が笑った。

「――さて。酷な事をお訊ねしますが、青蘭嬢。いままでに受け取った不審な手紙を我々に見せては頂けないでしょうか？」

「あ、はい。そうですね」

婦人用の小さな鞆に手をつ込み、そこから何重にも油紙に包まれた封筒を藍玉の方へと寄越す。

常の如く淡々とした様子で受け取った藍玉が、封筒から紙を取り出した。

「――確かに、受け取って嬉しい物とは言えんな」

横から覗き込んだ魔王が、苦々し気に眉根を寄せる。

どこにでもありそうなありふれた用紙には、乱暴な筆跡で『嘘つき女』『裏切り者』『許さない』といった具合の恨み言が延々と綴られていた。

「最初にこれを受け取ったときは、暖炉で燃やしてしまいました……。でも、最初の手紙を受け取ってから、三日おきくらいにこのような事が書かれた手紙が家のポストに届くんです」

「旦那には、この事は？」

「言っておりません」

悲しそうに、青蘭が首を横に振る。

「届く時間もまちまちで……。でも、家に私しかない時に限って届くんです」

「消印や、差出人の住所も書かれていませんね。まあ、当然ですが」

手紙ではなく、それが入っていた封筒を何度も見返しながら藍玉が一人冷静に呟く。

そうした後、訝し気に封筒の表、受取人の名前が書かれた部分を指でなぞった。

「変ですね……。この宛先、何故……」

「兎も角、こんな不愉快な手紙など二度と見たくないだろう。これは我々が預かる事にしよう」

「ありがとうございます」

頭を下げた青蘭に、魔王が「ところで」と口を開いた。

「ところで、青蘭嬢。今日はここに来るまでに視線を感じなかったのか？」

「はい。その手紙が届いた日には視線は感じませんの」

「ふうん……」

焦げ茶色の瞳に確信を込めて青蘭が頷く。

そんな彼女に、やや居心地が悪そうな表情に成った魔王が忌々し気に口を再度開いた。

「その、青蘭嬢。貴女が今置かれている状況についてだが……」

「はい。なんでしょう、お役人様」

「おそらく貴方はストーカー被害にあっておられます」

「……え？」

きょとん、と目を何度も瞬かせる青蘭。

何がなんだか分かっていない様子の彼女に、溜め息を交えつつ魔王が頷いた。

「信じられない気持ちは分かるが。おそらくこれはストーカーとみて間違いないだろう。――犯人はどうやら、青蘭嬢があのヘタレの奥方に成った事が相当気に食わないらしい」

書状（後書き）

へタレこと青蘭嬢の旦那様は後々登場の予定。

魔王のトラウマ（前書き）

ストーカーとは？

：特定の個人に対し異常な程関心を持ち、その人の意思に反して後を追いつづける者。

＜広辞苑 第五版＞ 参照

魔王のトラウマ

ギラギラと理解し難い、いや、理解したくない欲望を火種に燃える、ざくろいろ石榴色の瞳。

普段は猫の様に細められているそれが嘘の様に見開いて、自分の姿を映しているのかと思うと鳥肌が立った。

『好きなんだよ、心の底から。君しか欲しくないんだ』

形の良い唇が動いて、その様な言の葉を紡ぐ。

相手が囁くだけで、熱のこもった吐息が肌をくすぐる。

その感触がおぞましくて、自分の顔面から血の気が引いていくのが分かる。

『こんな想いは初めてなんだ。お願いだから受け止めて欲しい』

きめ細やかな白磁の肌と、その肌に栄える黄金の髪。

髪の一筋から睫毛の一本に至るまでに完成された神々しいまでの美しさ。

至高の芸術品を思わせるその顔を寄せられれば、誰であれ陶然としてその美しさに酔ってしまうだろう。

『ねえ、お願いだ。僕の想いを受け止めてくれるよね？』

——しかし、生憎そのお綺麗な顔を寄せられた所で自分が感じるのは嫌悪感だけだ。

というか、目の前のこいつは、自分がどれだけ嫌そうな顔をしていて、どれだけ離れて欲しがっているのかが見えないのだろうか。

『愛しているよ、***。どうか結婚して欲しい』

死ぬ気で嫌そうな顔をしているであろうに、相手はそんな事を気にもしない。

——勝手な事を言いながら、赤い唇を寄せてくる相手に、自分分は絶叫した。

* * *

「——っ、ぎゃああああああっ!!」

「^いかなさったのじゃっ、魔王陛下!？」

それこそ身も蓋も無い叫び声が、城中に響き渡ったであろう。

場所は、魔王城の心臓部。

言わずもがな、魔王の執務室が悲鳴の発信源であった。

「へ、陛下! 何が何なのかよう分からんのじゃが、ひとまず落ち着くのじゃ!!」

「うわああああっ! 怖気と鳥肌と^{じんましん}蕁麻疹が立ってるうううっ!!」

今までに目にした事が無い位、その魔性の美貌を青ざめさせた魔王が両手で二の腕を^{こすり}擦る。

宣言通り、微かに露出している肌の一部からは鳥肌が立っていた。

「か、過去に例を見ない、気持ちの悪い夢を見てしまった……」
「……大丈夫、ですかの?」

^{そうひ}十五歳程度の容姿でありながら、達観した老人の様な口調で話す蒼氷が、やや呆れた様に頭を振る。

その隣で、魔王の方は先程思い出してしまった忌まわしい過去に

頭を抱えた。

「うう……。なんだってば、今更あんな夢を……。もう二度と見るまいと思っていたのに……」

「随分な悪夢を見られたようです。折角の気晴らしも、上手くいかなかった様で」

ふふふ、と含み笑いをする蒼氷に、未だ青ざめた顔が向けられる。琥珀色の双眸が、閉ざされたままの両眼をじっとりとした視線で見据えた。

「——人が悪いぞ。仕事の中に寝てしまって悪かったな」
「いえいえ。その様な些事は気にしておりませぬよ、魔王陛下」

寝る事は育つと言いますからのう、と言ってほけほけと笑う側近を魔王が睨む。

他は誰であれ、少なくとも現在の自分と似た様な年格好の蒼氷にだけには言われたくない台詞だ。

「して？ 何故、悪夢などを視られたのかをお聞きしても？」

「大した事じゃないさ。原因は今日の青蘭嬢の話だろうな」

「青蘭嬢……？ あの灰砂坊かいさの奥方の事ですか？ 三月程前に、奥方を迎えられた？」

サイン
印が押された書類を小分けして運びながら、蒼氷が首を傾げる。それによりやく鳥肌が収まって来た魔王が小さく頷いた。

「ああ。ちよつと警吏宛の嘆願書が混じっていたからな、藍玉と役人に扮して会いに行ってみたんだ」

「それで？ 確か奥方殿は元は人間族でございましたな。何か不都

合が？」

「それがなあ……」

大きな溜め息を吐く。

口と同時に手を動かしながら、休憩時間の間に起こった一連の出来事を話す。

「ふーむ。聞けば聞く程、ストーカーの被害に遭っておられる様に見られますのう」

「だろ？ 一応証拠の手紙を受け取って、念のため藍玉に風で青蘭嬢の周囲を見張らせている」

水の精霊族ウンディーネと風の精霊族シルフの混血児である藍玉は、風と水の二元素を操る事が出来る魔族だ。

「しかし、魔王陛下。あのヘタレ……失敬、灰砂の坊やには伝える気はないのですかの？」

「夫に迷惑をかけたくないというのが青蘭嬢の言い分だったが、オレとしては明日の朝一番にあのヘタレに会いに行って、奥方の身に何が起こっているのか知らせてやるつもりだ。仕事が忙しいらしいが、それこそ魔王命令で何とかしてやる」

堂々と公私混同を宣言して、羽根ペンを動かす。

そんな魔王の隣で、顎に指先を当てて考え込む様な仕草を取っていた蒼水が閉ざされたままの双眸を魔王へと向けた。

「……魔王陛下」

「なんだ、蒼水」

「もしか、ストーカー被害に、過去遭った事が？」

「……なんでそう思ったんだ？」

「陛下の嫌がり様がどうにも尋常でないようですからもう」
「……」

———その無言が、返答であった。

魔王のトラウマ（後書き）

灰砂…青蘭嬢の旦那さん。後々、登場予定。

旦那様は魔族様（前書き）

ようやく青蘭嬢の旦那様登場です。

旦那様は魔族様

「ちょっと失礼するぞ、朱炎^{しゅえん}」

「ま、まあ！ 魔王陛下^{しゅえん}！！」

座り心地の良さそうな椅子に座し、孔雀の羽根ペンを握って部下に指図をしていた朱炎が、扉を押して入って来た魔王に頬を赤らめる。

そうして、同時にあたふたと体のあちこちに手を走らせては、ずれてもいない髪飾りの位置を直した。

「やあ、朝早くに済まないな。ちょっと人を探しているのだが」

「あら。誰をですか？」

「いや、それがな……」

きよろきよると、広々とした室内を見渡す。

室内のあちこちに置かれた仕事机に座っている朱炎配下の魔族達が魔王の入室に慌てて跪いた。

「あー、別に気にしなくていいから。オレの事は空気と思って仕事に勤しんでくれ」

「出来ません！！」

手で立つ様に合図しながら、にっこり笑った魔王の御言葉に、魔族達が声を合わせて絶叫する。

魔族に取って、最も慕わしい存在である陛下を空気だなんて……！ という無言の抗議もなんのその、魔王は何か言いたげな魔族達の間に視線を走らせ、お目当ての人物を見つけ出した。

「ああ、いたいた。——おいで、灰砂^{かいさ}」

「わ、私ですかっ!？」

幼い容姿とはいえ、魔性の美貌に微笑みかけられ、灰砂と呼ばれた魔族が慌てて立ち上がる。

女性ながらも長身である朱炎よりもやや背が低い、銀縁眼鏡をかけた人間族における二十歳後半^{はたち}の男だ。

肩を越す程度の長さの癖の無い暗灰色の髪を白いリボンで結び、背中に髪を垂らしている。

明るい水色の瞳が、忙しく動いて何度も瞬く。

文官の制服をきっちりと着こなした硬派で真面目な雰囲気を持ち主であるが、今は少しばかり不安そうだ。

「そう固くなる事は無い。暫くの間、こいつを借りていくよ」

「承りましたわ、魔王陛下」

上司である朱炎に助けを求める様に何度も水色の瞳が動くが、頬を紅く染めたままうっとりとして魔王を見つめる朱炎は気付かない。

敬愛する魔王に呼び出される理由も分からないまま、子供姿の魔王に半ば引き摺られていった同僚の姿に、室内の魔族達は好奇心と羨望の入り交じった視線を送ったのだが。

「————なにぼさつとしているの! 仕事しなさい、仕事っ!」

魔王の姿が見えなくなった途端、恋する乙女から仕事の鬼と変貌した朱炎に怒鳴りつけられ、魔王の後姿を見送っていた魔族達は慌てて仕事を再開したのであった。

「そう固くなるな。お前がヘマをしたから呼び出した訳じゃない」
「は、はい」

晴れ渡った夜空の色の城壁の上から広大な領土を見下ろしながら、魔王が宥める様に灰砂へと声をかける。

途中、巡回途中の魔族の兵士達の敬礼を受けながら、二人は城壁の端まで足を進める。

興味深そうにこちらへと視線を寄越して来る兵士達に軽く手を振って人払いを命ずると、心得た表情になった兵士達が二人の側から離れていった。

足を止めた魔王の前に、灰砂が跪く。
明るい水色の瞳と琥珀色の視線が同じ目線で交差した。

「昨日の事なんだが、お前の嫁さんにあったぞ。可愛い子じゃないか」

「ええっ！！ サファイ、青蘭せいらんに会ったんですか！？」

相手は魔王であるというのに、突然の告白に灰砂が飛び上がる。
もしここに朱炎がいたら、即刻不敬罪で牢に叩き込まれたかもしれない。

「一応知らせとしては聞いてはいたが、直接青蘭嬢に会ったのは昨日が初めてだ。良い人を選んだな、灰砂」

「……はい」

自分の言葉を噛み締める様に灰砂が頷く。

城壁の上を吹き抜ける一陣の風が、暗灰色の髪と光を吸い込む様な黒髪を空へと巻き上げた。

「人間族の娘として培った全てを捨てて、お前と共に生きてくれる事を選んだ希有な女性だ。彼女を裏切る様な事をするなよ」

「勿論です……っ！ そんな事は絶対にしません！！」

「いい返事だ。若人はこうじゃなくちゃな」

にやりと笑った魔王は見かけだけなら二十歳後半の灰砂よりも若いので、その台詞にはなんとも違和感があった。

「……………だがな」

「陛下？」

不穏な雰囲気を感じ取った灰砂が、おそろおそろといった様子で、僅かに自分の目線よりも高いうちにある魔王の顔を覗き込む。

……………覗き込んだ先の魔性の美貌は妖しく歪んで、嗤っていた。

「その可愛い嫁の危機に、なんっっでお前は気が付いとらんのだー
ーっ！！」

「わあああっ！！ お、お許しをつ、魔王陛下ー！！？」

すっかりドスの利いた魔王の怒声と、訳が分からないまま謝罪する灰砂の悲鳴が、城壁の上にいる兵士達の耳にまで届いた。

「そ、そんな……！ サファイ、青蘭がストーカー被害に遭ってるだ
なんて……！！？」

書状が自分の書類の山の中に紛れ込んでいたのは誤摩化して、昨日の出来事をかいつまんで話すと、灰砂は銀縁眼鏡の奥の明るい水

色の瞳を大きく見張った。

相手が魔王でなかったら胸ぐらを掴んで確かめてやりたいところだろうが、敬愛と思慕の対象である魔王にその様な暴挙を行える訳が無い。

「それもここ最近の話ではない。かなり前からのようだ」

「どうして教えてくれなかったんだ……」

がつくりと肩を落として嘆く灰砂の明るい水色の双眸と目線を合わせ、魔王もまた床に片膝を付ける。

「お前に迷惑をかけたくなかったんだと。お前が忙しそうだから、邪魔なんかしてはいけなないと必死に我慢していたらしい。本当のところ、お前にこうしてオレが伝えた事すら彼女は望んでいないだろうよ」

「陛下……」

ぽんぽん、と抱きしめる様にして肩を叩く。

今は小さな体をしているものの、魔族の父として母として等しく全ての魔族を愛おしんでくれる魔王に灰砂も震える手でしがみつく。

「――……彼女の様子が可笑しかった事には薄々勘付いていました。でも、彼女の優しさに甘えて、自分はその原因について話を聞こうとしなかったんです」

「――莫迦だなあ、灰砂」

「……そうですね」

泣き笑いの様に震える声を耳にして、魔王がゆったりと苦笑する。小さな手が風に揺れる暗灰色の髪を優しく梳いた。

「情けないですね。彼女が自分の手を取ってくれた時に守るって誓ったのに、全然守れてない。……今回だって、陛下に教えて頂かなければ気付かなかったでしょう」

「それはどうだろうなあ。オレは、案外お前は早くに気付いたと思うが」

統べる者としてではなく、魔族を庇護し愛する者として正直に答えると、くぐもった声が「そうでしょうか」と呟いた。

「応とも。何たって、お前はオレの自慢の子供達の一人だもの」
「よく、分かんないですよ……」

腕の中で小さく笑う気配に、そっと抱きしめていた腕を解く。
毅然とした輝きを宿した明るい水色の瞳が真っ直ぐに魔王の琥珀の両眼を見つめた。

「お知らせ頂き感謝します、陛下。つきましては、本日の仕事です
が……」

「ああ。今すぐにも青蘭嬢の元に行ってやれ。彼女が本当に会いたいのはオレや藍玉ではなく、お前だろうよ」

「————はい」

深々と頭を下げた灰砂の暗灰色の髪が風に靡く。

優しく魔王が微笑んで、踵を返した。来た時と同じ様に、後ろに灰砂を従えたまま城壁を歩く。

「朱炎にはオレから何とか言っとくよ。だから今日ばかりは安心しろ」

「それは助かります。朱炎様、怒ると物凄く怖いんですよ」

心底ホッとした様な言い方に、くつくつと魔王が喉を鳴らす。

「ただし今回だけだからな。今度同じ様な事をしてみる。――――お前の奥さん、誘惑するぞ」

「ええっ!? それだけは勘弁してくださいっ!!」

思わずギョツとした灰砂を振り返って、魔王が妖艶に笑う。

子供姿とはいえ、魔性の微笑みを向けられて思わずゾクリとしたものが背筋を走った。

男とも女とも見分けられぬ中性的な美貌がやけに男らしくみえて、灰砂は生唾を飲み込む。

「出来ないと思うなよ? その気になれば男でも女でも落せるからな」

「本気で止めて下さい……」

十年単位で行われる魔族内での「初恋の人ランキング」で男女問わず堂々の一位に輝き続けている魔王に本気で口説かれたらどんな相手だっところり、といってしまうだろう。

簡単にその様子が想像出来たらしい灰砂が青くなったのを愉快そうに眺めていた魔王の顔が、不意に険しくなる。

「――藍玉か? どうしたんだ?」

『少々、お伝えしたい事が』

「……言ってみろ」

『実は……』

風と共に流れて来た固い声と二言三言会話を交わして、後ろで黙って控えていた灰砂の方を振り返える。

険しい顔をしていた灰砂に小さく目配せすると、心得た様に暗灰

色の髪に明るい水色の瞳の青年は魔王に向かって頷いてみせた。

旦那様は魔族様（後書き）

ちなみに「母親に欲しい人・父親に欲しい人」ランキングでも同様に一位の魔王様。

その頃の彼女（前書き）

少し前の話。

その頃の彼女

———時は少しばかり遡る。

夫の灰砂かいさが魔王の叱責を受けていたのとほぼ同時刻。

元・村娘で今は灰砂の妻である青蘭せいらんは、養母の屋敷を辞去した歸りに市場へと向かっていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

貴族のお嬢様のように十分な教育を受けてきたわけでも、周囲の目を見張らせるような優れた容姿など持っていない自分。

そんな自分の存在を魔族の人々が受け入れてくれるのだろうかと不安に思っていた青蘭を、夫の母も夫の同族達も快く受け入れてくれた。

その事が嬉しくて、心から愛している人とこれからの一生の苦楽を共に生きていこうと誓った矢先に起こった不審な出来事の数々。

誰にも言えず、抱え込むしか出来なかった自分が出来たのは一通の書状を送る事だった。

そして、半ばダメ元で送ったそれに答えてやって来てくれた二人の役人のおかげで、ここ暫く無かったほど青蘭の心は軽やかであった。

———こうして晴れやかな気持ちで街を歩くのも、本当に久しぶりであった。

人間の国との境目に最も近いこの街は、人間族である青蘭にとって見慣れた物が多く立ち並ぶ街だ。

有事の際は国境に近いということで戦火に見舞われる事もあった

らしいが、ここ三百年ばかりそんな話はないよ、と夫が笑って教えてくれたことを思い出す。

街を歩いている人々の中には、わざわざ人間国の領土から品物を売りに来ている青蘭の元・同族達の姿もあって、ひよっとしたら知り合いも来ているかもしれないと思ったが、すぐに頭を振った。

青蘭がサファイアとして暮らしていた村は、人間族の国に数多ある村の中でも特に魔族蔑視の風潮の強い村であった。

時折村を訪れる魔族を『半端者』『混ざり者』と言って影で嘲笑し、そのくせ彼らの持ち込む商品を目の色を変えて欲がる。

そんな大人たちの姿を見ていたら、子供達も自然とそう育つ。

——そのため、魔族を蔑まない青蘭という存在はかなり異質であったと思う。

親が村人の中でも裕福な人間であったおかげで、村の教室ではなく隣の大きな学校に行かしてもらえたことが大きな違いだろう。

その学校の先生たちの中でも特に懐いていた教師が魔族最悪であったせいもあって、青蘭は村の他の子供たちのようにはならなかった。

——だからこそ、魔族である灰砂と一生を添い遂げることを決心する事が出来た。

その結果、人間のサファイアとして培って来たものを悉く捨て去る羽目になったが、そのことに関して青蘭が後悔することはなかった。

決して小さくない、寧ろ広大と言ってもいい魔族の領土。

魔王の住まう魔王城を中心に、蜘蛛の巣状に張り巡らされた街道とそこに寄り添う形で建てられた魔族の人々が住まう城下町。

最も城より遠い国外れに位置するこの町にさえ、綺麗に整備され

た石畳が敷かれており、魔王という絶対者の庇護の元で魔族がいかに高水準な暮らしを維持しているのかが一目でわかる。

魔族の誰もが尊敬し、第二の父母として慕う彼の王が数週間前に現れた勇者によって倒されたなどという噂も伝わってくるが、そんな事はある得ないと養母が笑っていたのを思い出す。

伝え聞いた魔王の姿は、光を吸い込むような長い黒髪に琥珀色の瞳を持った魔性の美貌の持ち主だというが、本当なのだろうか。

徒然とそのようなことを考えながら、足を進める。

ここ三月の間に顔なじみとなった生鮮食品を扱うお店の女店主と挨拶を交わし、はしゃぎながら走りゆく魔族の子供達に笑顔を向ける。

持ってきた買い物籠がずっしりとした重みに変じた時には、中天にかかっていた太陽は大分斜めに傾いていた。

「気を付けて帰りなよ、青蘭ちゃん。ここ最近、馬鹿な噂を本気にとった輩が多いからね。用心に越したことはないよ」

「変な噂っていうと、魔王様の事ですか？」

「そうさ。なんでも異世界から召喚された勇者に魔王様が討たれたとかいう言っさ。全く、わたしたちの魔王陛下がそんな子供に討たれる訳がないだろうに」

噂に振り回されている人々を馬鹿にするように鼻を鳴らし、仲良くなった三軒隣の奥様が胸を張る。

この国に住まう魔族として自分達の王を誇りに思っているのが一目でわかるその姿に、青蘭が表情を緩ませる。

「いつか、会ってみたいです。魔王陛下に。皆様に話を聞く限り、とっても素敵な方みたいです」

「そうだねえ。今度旦那に頼んでごらんよ」

「うふふ、そうします」

「そうしな。それじゃあ、わたしはここだから。また明日ね、青蘭ちゃん」

笑顔で手を振って立ち去っていく相手を見送ると、そのまままっすぐ我が家へと足を向ける。

赤みの強い橙色の斜光に町が染まる中、穏やかな気分で足を進めていた青蘭が不意に立ち止まった。

「……………」

恐る恐る、振り向いてみる。

路地の向こうで子供達が家の中に飛び込んでいく姿が見える、何気ない日常の風景だ——それなのに。

カチカチ、と耳障りな音が耳に入ってくる。

暫くしてそれが自分の歯が噛み合わないせいで成っている音だと気付いた。

———いる。

昨日今日と感じなかったせいで浮かれていたが、この絡み付く様な視線を忘れる訳が無い。

はしゃいで、警戒を怠った自分の責任だ。せめてもう少し日が高いうちに家に帰るべきだった。

後悔ばかりが浮かんて来る。家まであと少しの距離なのに、両足が石になったかのように動かない。

『……………サファイア?』

———金縛りが解けた。

するり、と手から買い物籠が滑り落ちたが、気にしてなどいられない。

次の瞬間には、脱兎のごとくその場から駆け出した。

その頃の彼女（後書き）

ちよつと長めになりました。

遭遇

「——はあっ、はあっ、はあ……！」

——走る、走る。

家に辿り着ければきつと大丈夫。

玄関の扉を開けて、誰も入れない様に鍵を確^{しっか}りと掛けてしまえば良い。

そうすれば、誰も入って来れない。

額から伝った冷や汗を乱暴な仕草で振り払い、必死に強張る足を動かす。

じわり、と滲む涙を無視して唯ひたすらに前を見据える。

見慣れた玄関と三ヶ月の間に馴染んだ風景が視界に入ってくる。

——……ああ。あそこまで行けたら、もう大丈夫。

自分の家という、最も安心出来る場所を目にして、心を奮い立たせる。

視界の端で、髪に結んでいた白いリボンが翻った。

「はあっ、はあっ、はあっ——きゃあっ!？」

——左腕を、誰かに掴まれる。

その事実には半狂乱になってしまったと暴れ出す青蘭^{せいらん}の抵抗に、腕を掴んだ相手が舌打をしながらも家から離れた路地裏へと引きずり込む。

夕焼けの色に染まる見慣れた我が家から、薄暗く人通りの少ない

裏通りへ。

そのまま暗い路地へと乱暴に放り出され、青蘭の細い体が地面に叩き付けられた。

「――あぐっ！」

地面とぶつかる寸前に、腹部を庇う様に手を伸ばした。

今はまだ膨らんでもいないが、彼女の中にはもう一つの命が宿っている。

――その命を失う様な真似は、絶対に避けなければ。

「――っ、まさか。サフィア、お前、腹にあの魔族との子供がいるのか……？」

腹を庇う様な体勢で地面に転がった青蘭の姿を見て、彼女をここまで連れて来た誰かが震える声で呟いたのが聞こえる。

頭部の痛みを必死にこらえながら、青蘭は自分を見下ろす相手の姿に目を凝らした。

だが、路地の出入り口で夕焼けに染まる町をバックに立っているせいか、逆光を浴びている相手の顔はよく見えない。

「くそっ！ そんなこと認められるものか……！」

何処かで聞いた事のある声だとは思いますが、そんな事を気にしている場合ではない。

幸い、通りを隔てているとはいえ、この路地は自分の家の近くだ。声を張り上げて人を呼べば誰かが気付いてくれる筈だし、一刻も早く目の前の相手から離れたい。

「どこに行くつもりだ、サフィア……！」

「……………うあ！」

壁に凭れ掛かる様にして身を起こし、そのまま走って逃げようとした彼女の髪が、急な力で引っ張られる。

その際、髪を結んでいた白いリボンが解けた。

遠慮も何もない強い力で引っ張られたせいか、解けた白いリボンに栗色の髪の毛が絡まっている。

重力に従って地面に落ちていく“それ”を、涙の滲む視界で見つめる。

……………初めてあの人に貰ったプレゼントだった。

大事に、大事に取っていたのに。

「魔族の男と駆け落ちしたと……！ 巫山戯るな、俺がどんな目で……！！！」

髪にかかった力がなくなったかと思うと、無造作に襟首を掴まれて相手の方へと引き寄せられる。

「いやあ、放してえ！」

「うるさい、いい加減に黙れ！！！」

相手の側に寄りたくない一心で、がむしやらに暴れ出した青蘭に相手が怒声を上げる。

無茶苦茶に振り回していた青蘭の手が、偶然相手の肌を引っ掻いた。

「……………っ！」

反撃に驚いたのか、相手が襟首を掴む力を緩める。

その隙に地を蹴って、相手から離れた。

荒い息に肩を上下させながら、壁に手をつける。

顔を上げた先の相手の姿に、青蘭は目を見張った。

「なっ、なんであんたがここに……！」

「黙れ！ お前がそれを言うのか……！」

激高した相手が青蘭に向かって大きく手を振るう。

——殴られる……！

そう思って青蘭が目を瞑ったその矢先——

「——くたばれっ、ストーカー……！」

——怒りに満ちていながらも、凜然とした声が路地裏に響き渡った。

「があっ……！」

続いて、何か重量のある物が空を切る音と何かと何かがぶつかった鈍い音が青蘭の耳に届く。

同時に、びくりと震えた青蘭の体が暖かい物に包まれた。

「——……遅くなってごめん」

「灰砂^{かいさ}？ どうしてここに……？」

この世で一番安心出来る声に、青蘭が瞼を開く。
開かれた視界の先には、この時間にはまだ帰って来れない筈の夫の姿があった。

三角関係（前書き）

徐々に「魔王陛下」を気に入ってくださっている方々が増えてくださって、とても嬉しいです。

三角関係

「人の領土に潜り込んだ挙句、オレの大事な息子の可愛いお嫁さんを追い回すだと？ 貴様、覚悟は出来ているんだろうなあ、ああ！？」

「……魔王陛下、どうぞその辺で。ただでさえ貴方は怪力なので、それ以上なさったらその男が死にます」

青蘭相手に殴り掛かろうとした相手を思い切り蹴っ飛ばし、相手の襟首を締め上げて揺さぶる魔王に、付いて来た藍玉が冷静な口調でストップをかける。

兇悪な光を宿した琥珀の瞳が一瞬金色に輝くが、締め上げていた手から力が抜ける。

どさり、と低い音がして相手の体が石畳に叩き付けられた。

「……………っは。何者だ、貴様……………」

「一秒でも長く呼吸を続けたいのであれば、口を慎め人間」

無遠慮に魔王を見据えてなにかを口にしようとした男を藍玉が遮る。

冷酷な光を宿した藍色の瞳に睨みつけられ、男は気圧された様に押し黙った。

しかし、相手の血走った両眼は直ぐさま、離れた所で灰砂に守られる様に抱きしめられている青蘭へと向けられた。

「汚らわしい魔族めが…………！ サファイアからその手を放せ！」

「ストーリーカー風情が何を偉そうな事をほざいていやがる」

明らかに蔑みの感情で持って吐き捨てた男に、呆れた様に魔王が

口を動かす。

金色がかった冷たい琥珀の瞳が、青蘭と灰砂に向けられた途端、柔らかな光を浮かべた。

「済まなかったな、青蘭嬢。今回はオレ達の方が遅くなってしまった」

「いえ、いいえ！ そんな事は……！ でも、なんで夫が、灰砂がここに？ まだ帰って来れない時間じゃ……」

「奥さんのピンチに颯爽と現れるのが旦那の務め、って言われてね……」

「あなた……」

不思議そうに目を瞬かせる青蘭に向けて、へにやりとした苦笑を浮かべる灰砂。

頬を真っ赤に染めた青蘭が先程とはまた別の感情で目を潤ませ、夫の姿を上目遣いに見つめる。

そのまま新婚夫婦が甘い空気に突入しそうになった途端、自分の存在を忘れるなどばかりに男が騒ぎ立て始めた。

「なにが旦那に妻だ！ そんなこと認められるものか！！」

「いい加減うるさいぞ、ストーリーカー。第一、なんだってば貴様に二人の仲を認めてもらわなきゃならんのだ」

無関係だろうが、と大仰な溜め息を吐いた魔王の言葉に、男は声を荒げた。

「無関係じゃないっ！ 俺はその女の夫だ！」

“その女”のところで青蘭を指差した男の言葉に、そこに居た誰もが沈黙する。

ややあつて、不機嫌そうに眉根を寄せた藍玉がぽつり、と呟いた。

「――つまり、青蘭嬢は二重結婚をしていると？」

「んなっ！ そんな訳ありません！！」

顔を怒りで真っ赤に染めた青蘭が、未だに自分の事を指差す男に向かつて吠えた。

「何勝手な事言ってるのよ！！ ――この男と私が夫婦だなんて、断じてありませんっ！！」

「じゃあ、何だったんですか？」

台詞の前半は男に向けて、後半は藍玉を見つめて叫んだ青蘭に、至極冷静な質問が入る。

「…………元、許嫁です」

「あ、そういうば。その男、青蘭の村に住んでいた人だ」

青蘭の言葉を受けて、灰砂がポン！ と掌を打つ。

今思い出した、と言わんばかりのその態度に肩を軽くすくめ、魔王が男へと訊ねる。

「――と、言っているが、そうなのか？」

「……そうだ」

「許嫁なら夫婦ではありませんよね」

「確かに」

うんうん、と何度も魔王が頷く。

そして説明を求める様に青蘭と灰砂に琥珀の視線を寄越した。

「それで？ このストーカーと青蘭嬢との関係はただの許嫁でそれ以上でもそれ以下でもないのか？」

「当然です。許嫁と言っても、私とその男に心を動かされた事は一度たりともありません！ 単なる村長の息子と村娘な関係でした！」

鼻息も荒く断言してのけた青蘭の姿に、村長の息子がショックを受けた様な表情になる。

一人納得がいった藍玉が腕を組んだ。

「成程。ストーカーが村長の息子で、村に暮らしていた頃の青蘭嬢と許嫁の関係にあったのならば、この手紙の内容にも納得が行きますね。」

彼にしてみれば、青蘭嬢の駆け落ちは裏切りにしか思えないでしょうから」

昨日会った時に受け取った、差出人不明の手紙を脳裏に思い起す。

受取人の名前の所に『青蘭』ではなく『サフィア』と書かれていたからおそらく人間族関係の者だろうと思っていたが、その通りだった。

「つまり、貴方はわざわざ青蘭嬢、いえサフィア嬢を連れ戻しに来た訳ですか」

「そうに決まっているだろうが！ でなきゃ、誰が薄汚い『混ざり者』の国になんか来るかよ！」

「————！」

灰砂と藍玉の表情が凍る。

様々な要因でこの世界に生まれ落ちた混血児の血を引く魔族達に

取っての最大の侮蔑の言葉。

それを敬愛する魔王の前で吐かれ、頭が真っ赤に染まる。

——他の誰かの前で口にされても構わないが、この人の前でだけは許さない。

——忌避される傾向にあった混血児達を慈しみ、守り続けてくれた魔王の前だけでは、その様な言葉は許さない。

風が渦を巻き、大地が不穏に揺れる。

二人の魔族の怒りに呼応した様に元素が蠢いて、男へと牙を剥く——その前に。

焦げ茶色の瞳を吊り上げ顔を真っ赤に染めた青蘭が、男に渾身の力を込めた平手打ちを喰らわせた。

激怒そして決着（前書き）

一気に『魔王陛下』のお気に入り登録数が五百件になっていました……！

とっても嬉しいです。

激怒そして決着

——乾いた音が路地裏に響き渡る。

藍玉らんぎよくと灰砂かいさの二人が呆氣にとられた表情で仁王立ちする青蘭せいらんを見つめ、魔王は愉快そうに金色がかった琥珀の双眸を細めた。

「この恥知らずっ！　よくもまあ、私の目の前で私の旦那とその同族の皆様を馬鹿にする様な言葉が吐けるわね！」

「サ、サファイア……？」

何がなんだか分からないという顔で呆然と地面に尻餅をついた体勢のまま、自分を見上げてくる男に向けて青蘭が鼻を鳴らす。

「この際だから言わせてもらいますけどね、私は昔から何も考えずに大人達の真似をしているあんたのそーいうところが大っ嫌いだったのよ！！　魔族の人達の事を散々馬鹿にしているくせに、彼らにたまに商品を持ち込みに来た時だけ媚びへつらって……！　今回の事だってそうよ。私、言ったわよね？　村を出て行く前にあんたと正式に婚約を解消するって！！　違う！？」

「そんなのお前がその『混ざり者』に騙されているからに決まってる！　だから俺は……！」

灰砂を指差しながら訴える元・許嫁に、青蘭がそれはそれは冷たい視線を送る。

極寒の地の氷塊も目じゃない程冷たい声が、可愛らしい桃色の唇から零れ出た。

「——ふーん。だからあんな恨み言ばかり綴った手紙を送ったり、人の事を朝も夜も付け回していた訳？」

「そ、それは……っ!」

誉められる様な事をしていた訳ではないと本人も一応自覚していたのだろう。

口ごもった男に、これでもかと言わんばかりに冷えきった視線を落す青蘭。

新妻の初めて見る一面に、灰砂は惚けた様に口を開いている。

「だって、許せる訳が無いだろう! 俺は昔からお前の事がす、好きだったんだぞ!

それをぽっと出の、しかも魔族の男なんかにかっさらわれて許せるかよ!」

「はあっ!? 何、今更な事を言ってるのよ!」

村長の息子の顔を赤らめながらの告白に、藍玉がこいつもヘタレか……と乾いた視線を送る。

「——おい、ストーカー。貴様、青蘭嬢に惚れていたのか?」

「そっ、そうだ!」

「……ほんっつとうにいい迷惑だわ」

先程から黙って光景を眺めていた魔王が不意に口を開く。

魔王の質問に即答してのけた男に、青蘭が苦々し気な表情でぼそりと呟いた。

「ほう……。つまるところ、青蘭嬢を散々怯えさせた一連の出来事は貴様の愛情が為せる技だとほざく訳だな」

「——魔王陛下?」

顔を伏せ、視線を合わせる事無く呟きを続ける魔王に藍玉が訝し

気な声を上げる。

その場に跪く様にして魔王の顔を覗き込もうとした藍玉の前に、幼いながらも至高の芸術作品を思わせる整った顔がゆっくりと持ち上がる。

「なっ、なんだよ。なんか文句でもあるのかよっ!？」

「——大有りだ、大戯け」おおたわ

不穏な物を感じ取ったらしい男が騒ぐが、魔王は無表情なまま淡々とした口調で呟きを続ける。

「貴様に分かるか? ——朝、穏やかな気分で目覚めたと思ったら、自分のベットの周りを片判が押された婚姻届で囲まれていた時のオレの気分を。——仕事の視察先に、いつの間にか会いたくもない相手の姿があった時の、あの絶望的な気持ち。——どこぞでばったり出くわしでもしたら『結婚してくれ』と剣を片手に大陸中を追いかけて回された際の、あの怖気が走る程の嫌悪感を……!」

「へ? あ?」

「断っても断っても諦める事無く人の事を追いかけて回してくるあのストーリーカーを、何度葬り去ってやろうかと考えた事か……! 事故を装って火山の火口に突き落としかけた事も一度や二度では済まなかったとも……!」

「へ、陛下? どうか、お気を確かに……!」

淡々とした声なのに、底の方で溶岩マグマが沈んでいる様な物騒な響きだ。

ぶつぶつと呪いの様に呟き続ける魔王。

敬愛する魔王の初めて見る姿に、灰砂が狼狽えた様な声を出す。

「ストーリーカー、貴様、火山に突き落とされるだけの事をしたと理解

しているんだろうなあ、ああ!？」

「その通りよ! 毎日毎日、気持ちの悪い視線を寄越して、呪いの手紙を三日に一回は送って来たりしてっ! どれだけ私が怖かったのか、あんたは知らないでしょうとも! それを好きだったから、ですって? 巫山戯んのも大概にしなさいよ!！」

「ひいひいひいっ!！」

今にも背後でおどろおどろしい暗黒が渦を巻いて召還されそうな魔王と怒り心頭な青蘭の迫力に、男が悲鳴を上げる。

「愛だの恋だの言ったら何をしてても許されんとか思ってるんじゃないわよ、このすつとこどっこい!! そんな事言っている暇があれば、もっとマシな男になる努力でもしてなさいっ!」

青蘭による、華麗なフォームを描いた回し蹴りが勢い良く男の頭にヒットする。

二回程バウンドしてから地面に叩き付けられた男を見下ろして、毅然とした声で青蘭は宣言した。

「それから――二度と私の旦那を馬鹿にする様な事を言うんじゃないわよ」

「青蘭……」

どうも新妻の逞しい一面に見惚れている同族の姿に、藍玉はやや疲れた様な溜め息を零したのであった。

＊ ＊ ＊

わざわざ国境を跨いでまで探しに来た想い人に蹴っ飛ばされ、地

面に無様に転がる（ある意味では）不幸なストーカー男の元へと近寄り、藍玉は男の意識を確認する。

かなり綺麗に青蘭の回し蹴りが決まっていたから予想はしていたが、男は見事に白目を剥いて泡を吹いていた。

———気絶しているのは間違いないだろう。

そう結論づけ、藍玉は膝を地面から離した。

その一方、子供姿の魔王が青蘭を誉め讃えていた。

「さすがだな、青蘭嬢。とても見事な回し蹴りだった」

「いやだわ、私ったらはしたないところを……」

照れくさそうに頬を染め、両頬を覆う青蘭。

綺麗と言うよりも可愛いという形容詞が似合いそうな青蘭からは、先程容赦なくストーカー男に回し蹴りを喰らわせた時の面影など微塵も感じられない。

「いやいや、思わず惚れてしまいそうだったぞ。そうだ、良ければ今度一緒に食事でもどうだ？」

「へ、陛下!!」

隣に旦那が立っているにもかかわらず、青蘭にお誘いをかける魔王に、灰砂が驚いて飛び上がる。

それに青蘭は笑って答えた。

「嬉しいお誘いですね。なら今度、夫の仕事が空いた時に二人でお伺いしますわ」

「せ、青蘭、僕も一緒にかい？」

「当然じゃない、変な灰砂」

不思議そうに首を傾げる新妻に、灰砂があたふたと手を振り回す。魔王が愉し気な笑声を上げた。

「残念だ。振られてしまったな」

「ひ、人の妻を口説こうとしないでくださいっ!!」

今にも泣き出してしまいそうな顔で青蘭の体を抱きしめる灰砂に、魔王はますます楽しそうな顔になる。

「陛下。ただ今、風でこの町の警吏の者を呼びました。まもなくこの場に来る事でしょう」

「そうか。ご苦労様、藍玉」

風に自らの言葉を乗せて、遠く離れた相手に言葉を届かせる。そうやってこの町の警吏を呼んだ藍玉に魔王は鷹揚に頷く。

その様子を眺めていた青蘭が、ここで今気付いたとばかりに手を合わせた。

「あの、今更になりますけど」

「どうしたんだ、青蘭？」

「お二人は、昨日来てくださったお役人様方ですよね？」

「何を言っているんだい、青蘭。こちらは我らが王であらせられる魔王陛下と魔王補佐・藍玉様だよ」

それより役人って、どういうことだい？

そう言って首を傾げる灰砂に、青蘭が呆然とした表情のまま凍り付く。

そんな彼女の前で、魔王が決まり悪そうに天を仰ぎ、藍玉はそっ

ぽを向いたのであった。

激怒そして決着（後書き）

魔王のストーカーは「魔王のトラウマ」に出て来た冒頭の人と同一人物です。

青蘭嬢、魔王のデートの誘いを華麗に一蹴。

もう一人のストーカー

『——…：僕、負けだね』

心底悔しそうに呟かれた言葉に、強張っていた肩から力が抜けるのを感じる。

砂塵やお互いの血液、流した汗や何やらで汚れた相手の横顔は、それでも尚その美しさを損なう事は無かった。

『悔しいけど、この勝負は君の勝ちだ。潔く負けを認めるよ』

長い長い戦闘で乱れた濃い金の髪が、汗で濡れた額に張り付く。

それを鬱陶し気に払い、それでも尚、未練の色を残す印象的な^{くろ}柘色^ざの双眸が自分を見つめる。

相手の手に握りしめられた白銀の剣が、微かな光を帯びて煌めいた。

『誓いは、誓いだ。僕の名と戦士としての誇りにかけて、君との間に交わされた契約に従うよ』

——その言葉を聞いて、自分の愛剣を握りしめていた右手に力がこもる。

噛み締めた歯の隙間から、長い溜め息を零した。

ああ、これでやっと……やっと、百数十年振りにこの^{ストーカー}変態から解放されるのかと思うと涙さえ零れかけた。

『でも、一生想い続けるのは構わないよね？』

そう思った矢先、朗らかに笑って言い切った相手の言葉に掴んで

いた剣が滑り落ちかけたのは余談だ。

＊ ＊ ＊ ＊

「――……いや、一生想わなくていいから。迷惑だから」

苦々し気な表情を浮かべたまま、魔王が突っ伏していた頭を持ち上げた。

しかしその途端、視界に入ってきた白い山を目にして、かなりうんざりとした表情になった。

「それにしても、蒼氷そうひの奴め。ちょっと出かけてただけなのに、そんなに怒らなくてもいいじゃないか――そう思うだろ、藍玉らんぎょく」

「――陛下、貴方の中には『反省』という言葉は無いのですか？」

魔王の巻き添えを食って未決済の書類の整理を押し付けられた藍玉が室内に入ってくる。

呆れた態度を隠しもしない青年に、魔王は口を尖らせた。

「やれやれ、昔はあんなに可愛かったのに。……年を食う度に可愛げが無くなりおって」

「……追加の書類です」

どさり、と一気に書類の山が増える。

魔王の表情が、無言のまま引き攣った。

「魔王陛下、遊んでいる暇があれば仕事して下さい。それと夢を視ている暇があればサインをお願いします」

「おおう。いつも以上に冷たいな、藍玉」

ぶつぶつと呟きながら、手に持った羽根ペンを左から右に動かしていく。

琥珀色の瞳が藍色の瞳と交差した。

「なんだ。随分と何か言いたげじゃないか。何か聞きたい事でもあるのか？」

「……お訊ねしても？」

「——ん。構わんよ」

快諾した魔王の言葉に背中を押され、藍玉が口を開く。

「では陛下。陛下をストーカーしていた相手はどうなったのですか？」

「よりにもよってそれを聞くのか……。まあ、いい。話を振ったのはオレの方だしな」

大きな溜め息を吐きながら、それでもサインをする手を休める事は無い。

決済済みの書類が、瞬間に積み重なっていった。

「かなり昔の事になるな。あのストーカー、何度断っても止めないから、ある日言っただよ。『真剣勝負をして、負けた方が勝った方の言う事を聞く』って」

「……成る程」

ぐしゃりと藍玉の手の中の真っ白な書類に皺が寄る。

それに気付いているのかいないのか、魔王は視線は書類に注いだまま口を動かした。

「——で、当然奴もオレの提案に乗った」

「そう、ですか……」

「念入りに人払いをした上で、当時は人の住んでいなかった荒れ野で決闘をしたんだ」

「荒れ野で？」

「おう。そうして七日七晩、それこそ死に物狂いで戦って、オレはとうとう二度とストーカーに脅かされる事の無い自由を勝ち取った！！
いやあ、あの時の嬉しさに勝る物はかつて無かったぞ」

その時の勝利の余韻を思い出しているのか、晴れ晴れとした笑顔を浮かべる魔王に藍玉が眉間の皺を深める。

上機嫌になってペンを進める魔王のすぐ隣で決済の済んだ書類を持ち上げながら、藍玉は脳裏の記憶を探った。

———今なお語り継がれている、魔王の武勇伝。

最強の存在として世界に名を馳せる魔王が、七日七晩も打ち合わなければならなかった程の相手は、数多い伝説の中でもただ一人だけ。

「いや、まさか……」

思い当たる相手の姿に、藍玉は訝し気な視線を執務中の魔王に送る。

紙を削る様な勢いで文字を綴っていく魔王は藍玉の事を気にしてもない。

今は去りし神族を祀る神殿に僧侶として紛れ込んだいた頃、散々目にした絵画や彫刻の主題として取り上げられる事の多い有名な神話。

人の寄り付かぬ荒野にて魔王と剣を打ち交わしたされている、とある男神。

陽光を紡いで溶かし合わせた様な金髪に印象的な柘榴の色の瞳の美青年として描かれる、雄々しき軍神。

——名を“柘榴のベルメーリヨ”

千の強者を屠り、万の怪物を降したとされる彼の神と魔王が争った荒野は溪谷へと地形を変えてしまう程、凄まじいものであったと言う。

種族の壁を問わず、多くの者が知っている魔王の武勲の一つであるその戦いが、どのような理由で始められたのかは誰も知らず、当事者であった魔王本人も何故か語る事が無かったため、長らく魔族七不思議の中に入っていたのだが……。

「神殿の者達が聞いたら発狂するな……」

「ん？ 何か言ったか、藍玉？」

神々の再来を今も待ち望み、一途に修行の日々を送る敬虔なる信徒達が、もしその様な真実を知れば世をはかなんで首を括りかねない。

一時期潜り込んでいた神殿に特に思い入れなどはないが、一生黙っていたように藍玉は決心したのであった。

もう一人のストーカー（後書き）

一応、話の中にヒントは散りばめてはおきましたが、如何でしたか？
魔王のストーカーの正体でした。＜ストーカー編＞は今話で終了です。

閑話：過去の断片（前書き）

補足的な話です。

閑話：過去の断片

○月○日 天気：晴

我らが偉大なる王にして親愛なる庇護者、魔王陛下の元で**代目の魔王補佐として任じられた。

陛下の御側で陛下の責務を支えるべくして設けられた役目を任せられたのだ。

陛下のご期待に反する事の無い様に、より一層誠意と忠心でもって陛下にお仕えしようと思う。

○月△日 天気：曇り

魔王補佐の職に就いてからもう数週間が経過した。

いつもは式典の時や陛下のご視察の際にしかお姿を拝見する事の出来ない陛下は、思っていた以上に気さくな御方で驚いた。

この様な御方が我々の王であられる事を誇りに思うが、たびたび息抜きと称して何処ぞに行かれてしまう事のは困る。

そう言えば、北方の国境付近で木の精霊族^{エルフ}の戦士達の姿が報告されているとの事。

戦争が始まるのだろうか……？

○月○日 天気：雨

良くない方に予想は的中した。戦争が起こったのだ。

陛下は戦場へと旅立たれ、留守の魔王城は魔王補佐である自分が預かる事となった。

陛下がお留守とはいえ、書類は回ってくる。暫く日記を書くのを中断しようと思う。

○月▽日 天気：快晴

戦争が終わり、陛下と魔族の勇士達が帰って来た。

今回の戦ではかなりの数の火の精霊族^{ドレゴン}の傭兵達の姿があり、少々苦戦を強いられたとか。

陛下に大きな傷の無かった事に、一臣民として安堵する。

しかし、陛下はどうしたのだろうか？ 折角の勝利だと言うのにも関わらず、顔色がよろしくない。

やはり、久方ぶりの戦で御疲れになられたのであろうか？

◎月△日 天気…曇りのち晴

朝起きてそうそう、驚いた事があった。

魔王城の出入りに使用する正門の前に、魔王陛下宛に大量の薔薇の花束が送られていたのだ。

情緒を解する事の無い自分でも思わず目を奪われた程の美しい赤薔薇だった。

香り、形、色の鮮やかさと言い、そのどれもが一級品だ。素晴らしい。

しかし、何故陛下は薔薇を受け取る事無く、城内の女性達に御配りする様に命じられたのであろう？

女性達は皆、美しい花束を賜った事で大喜びの様子であったが。

◎月◎日 天気…大雨

ここ最近の事だが、毎日の様に陛下宛に謎のお手紙が届く。

呪いや呪詛の込められた手紙ではないらしいが、それを受け取る度に陛下は火で燃やされる。

差出人は誰なのだろうか？ 陛下は初めて届いた物以外に目を御通しにならないが、中身にはなんと書いているのだろうか？

一度御伺いしてみた所「一度でも開いて読めば呪われるぞ。つくづく最初の手紙を読むべきではなかったと、オレは日々後悔している」と陛下が仰られた程なので、これ以上聞くべきではないのだらう。

▲月○日 天気…曇りのち雨

日に日に陛下が挙動不審になられている。

今までそのような事は無かったのに、寝室には強固な結界を張られ、よく姿をくまます様になられた。

同僚にそれとなく訊ねてみたが、曖昧に笑うばかりで答えてくれなかった。

やはり、自分が魔王補佐として至らぬせいなのであろうか？

そう言えば、先の戦の時から魔王城には毎日の様に薔薇の花束が届く。

全て種類も色も違う。明日には青色の薔薇が届くのではないかと侍女達が噂していた。

▲月△日 天気…晴のち曇り

本当に青い薔薇が届いた。自然界には存在していない種類の花だ。どうやって送り主は手に入れられたのであろう？ 謎だ。

謎と言えば、神族を束ねる神帝から陛下宛に親書が届いた。

どうやら何かについて陛下に謝罪している様だ。何についてだろう？

陛下が「謝るくらいならあの変態をどうかしてくれ……」と呻うめかれていた。

あの傲岸不遜を地で行く神族が謝るなんて、陛下は何をしでかしたのだろう。

(中略)

▽月◎日 天気…雪

陛下の御不調な訳がとうとう分かった。

三月ばかりを費やして、ようやく真相が判明した。

何故かと言うと、陛下の大事な公務の一つである城下町の視察の際に、突然謎の男が出現したのだ。

男は陛下の側に立たれてもちっとも見劣りしない美貌を持つ、神族であった。

柘榴色の印象的な目を持っていたため、人間族や精霊族の間で『軍神』と崇められている神で間違いない。

すわ、陛下のお命を狙いにやって来た神族の刺客かと身構えたら、開口一番に軍神が陛下に向かって愛を囁き出したので吃驚した。

あまりにも驚いたせいか、陛下が軍神に向けて放たれた攻撃を避けるのが一瞬遅れてしまった程だ、反省している。

同僚曰く、なんでも先の戦の際に陛下に一目惚れしたらしい。

おまけにいつ自分が気付くのか仲間内で賭けをしていたとか。全くもって困った同僚だ。

先の戦の際に従軍していた同僚が笑いながら教えてくれた事には、陛下はここ三月ばかり軍神に追いかけて回されていたそうだ。

国内では、陛下を応援する組とあまりの軍神の一途さに同情した魔族達による見守り隊が出来たとか。

しかし、どこからどう見ても陛下の軍神に対する行為は軍神の言う照れ隠しにしては、殺意が満ち溢れている様にしか見えないのだが。

それは兎も角、自分の鈍さには少々反省した。

これからは陛下に相応しい立派な魔王補佐になるべく、ますます精進を続け様と思う。

……神々を愚弄する訳ではないが、巷で尊崇の念を抱かれている軍神があのような御仁であったとは。

間違っても神殿関係者には見せられない光景だ。あまりにも可哀想すぎるので、一生黙っていようと心に決めた。

閑話：過去の断片（後書き）

藍玉よりも前の前の魔王補佐の話でした

闇に沈む（前書き）

新章開始。

更新、再開です。

闇に沈む

晴れ渡った夜空の色をした魔王城の尖塔の中でも、一際高い塔の屋根の上に小さな人影があった。

西の空に沈み行く太陽の斜光で横顔を茜色に染めあげながらも、人影は険しい表情を崩さない。

肩まである光を吸い込む黒髪に、細められた琥珀の瞳。

新雪を思わせる白い肌に、すっきりとした薄く紅い唇。

見た目は十歳程度の幼子そのものだが、深い叡智を宿した双眸が外見に反している。

少女とも少年とも判別出来ない、魔性の美貌とでも讃えるべき容姿だが、今は美しさよりも可愛らしさの方が強い。

夜と夕暮れの狭間。

大空が群青と橙の相反する二色に染め上げられる、自然の作り上げた芸術とでも言うべき素晴らしい景色に心を奪われる事も無く、子供は険しい表情のまま思考の海に沈んでいた。

「—————どういうことだ？」

沈黙を貫いていた子供が、ようやく口を開く。

険しい表情に反して、その声はとてもぞっとする程静かだった。

「ここ数百年の間に、こんな気配は感じた事が無かった筈……。それが何故、今になって……」

尖塔の屋根の端に、膝を伸ばして座り込んだ姿勢のまま子供は独

り言を続ける。

他に聞く者がいない独白は、塔の上を吹き抜ける風に紛れて口から零された途端に消えていく。

「——いや。逆に、オレがこの姿に変わったからか？ ……弱体化したせいで探知能力が上がったと考えた方がやはり自然か」

自らの小さな掌を見つめながら、子供は納得がいった様に何度も頷く。

そうしたまま、西日が沈む空へと挑む様な視線を送った。

「出所は人間族の知識の集う英知の蔵であるくダアトの塔か。—— ……そこに何が隠されている？」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

夜空の色をした魔王城より、遠く離れた地に聳え立つ白亜の城。鉄壁の防御を誇る彼の城に寄り添う様に、一つの長大な塔が建てられている。

人間族のありとあらゆる知識が収められた英知の蔵にして、魔法使いと呼ばれる者達の憧憬を一心に浴びる古塔。

——名をくダアトの塔と称すが、王国に住まう者達からはく塔と呼ばれる事が多い。

そのく塔の底の底、闇の闇。

地中奥深くまでに伸ばされた長い螺旋階段を下った先に、その部屋はある。

一筋の光でさえ入る事が許されない完全なる闇の底に、ソレは居た。

「――……大賢者様、これは一体……！」

「狼狽えるでない！ 下手に隙を見せればやられるのは農らの方だと心得よ」

悲鳴を堪える様に口元を覆った若い女が擦れた声を上げる。

混乱を隠せない女を叱咤する様に、嗟れた声が鋭く闇夜を走った。

「し、しかし、これは……」

「詳しい事は農らも分からぬ。ただコレは数百年程前の魔法使い達が見つつけ出し、代々＜塔＞の魔法使い達の間で受け継がれてきた物じゃ」

「こ、これが……」

――女が唾を飲み込む音が、やけに大きく闇に響く。

「秘中の秘ともされるコレを其方に見せたのは、偏に其方が魔王討伐の英雄にして＜塔＞の幹部たる次期賢者としての地位が間違いないからじゃ。それゆえ、努々（ゆめゆめ）この場で見たモノを他所へ告げるでないぞ」

「分かっております。しかし、これは……」

――どこか怯える様子の女の声を最後に、再び闇は沈黙に包まれた。

密談？

「いー天気だなあ」

「いー天気だねえ」

ぽかぽかとしたお昼下がり。

太陽の暖かい日差しが一番良く当たる魔王城中庭の芝生の上に、二人並んで寝転がる。

光を吸い込む様な黒髪の少年とも少女とも見える容姿の子供と濃い金髪に鍛えられた体躯を持つ背の高い青年。

彼らの正体は魔王城の主にして魔族の王たる魔王と、その配下の一人であり武官筆頭である緋晶である。

双方とも心地良さそうに目を細めて、うっとりとした表情を作っている。

魔王の光を吸い込む様な黒髪は日差しを浴びて艶を増し、緋晶の金髪はキラキラと輝いていた。

「ねー、陛下」

「んー？」

器用に片目を薄く見開いて、瞼の奥から鮮やかな緋色の瞳が覗く。緋色の瞳が隣で寝転がる魔王を映し出した。

「——なんかさー、平和だよねえ」

「緋晶？」

「俺さあ、思ってた訳。陛下が勇者に討たれたって聞いたたら、精霊族……特に木の精霊族エルフの石頭共が揃って国境にでも攻め込んでくる

んじゃないかって」

片目だけでなく両目を開いて、緋晶は頭上の遥か高くに広がる青空を眺める。

柔らかな風が寝転がる二人の肌をくすぐった。

「でもさあ、何にも起こらないよね。これでも俺、結構気を張ってたんだよ？」

「そうだな。でも、平和で結構じゃないか」

琥珀の瞳が優しい光を灯して緋晶を見つめる。

我が子を慈しむ母親の様な視線を浴びて、緋晶はむず痒そうな表情で鼻に皺を寄せた。

「陛下さー、なんかしたんじゃないの？」

「おや。どうしてお前はそう思うんだ？」

「だってさ、静かすぎるよ。ちよくちよく木の精霊族^{エルフ}の間者らしき奴らは来るくせに、それだけなんだよ？俺じゃなくなっちゃって、変に思ってるって」

組み合わせた両手の上に、頭を乗せる。

両手分だけ高くなった金色の頭に、魔王も対抗して両手の上に頭を乗せた。

「そう言われてもなあ。オレは特に何もしていないとも。まあ、昔散々仕返しと言う名目で脅しはしたが」

「……具体的に何をしたいのか、是非とも聞きたい所だね」

「知りたいのか？」

「んー、やめとく」

ごろり、と頭を真横に転がしたせいで、緋色の瞳が魔王の横顔を射抜く様に見やる。

魔王は薄く微笑むと、琥珀色の双眸を閉ざした。

「陛下と戦った事のある木の精霊族エルフが慎重派の大部分を占めているのはそう言う訳？」

「内緒だ」

——むす、と緋晶が拗ねた様な表情を作る。

再び開かれた琥珀色の瞳が愉快そうに煌めいて、紅い唇が弧を描いた。

「まあ。二日後、人間族の王国に朱炎が全権大使として赴く。オレが討たれてから初めての魔族の意思表示だ。奴らが本格的に動き出すならそれからだろうよ」

「ふーん、そっかあ」

掛け声を上げて、緋晶が上体を起こす。

衣服に付けられた多種多様な装飾品が、彼の動きに合わせて透き通った音色を奏でた。

「こればかりは朱炎の姐さんの手腕に期待するしかないね」

「——そうだな。……ところで気付いているのか、緋晶？」

「とーぜん。で、どうするの？」

今まで穏やかだった風が冷気を纏い、鋭さを帯びる。

子供姿の魔王と緋晶は示し合わせた様に勢い良く立ち上がると、手と手を取って走り出した。

「————待ちなさいっ!! 陛下っ、執務室にいないと思ったら

こんなところで油を売っていたんですか!!」

「発覚すんの早すぎだよっ、陛下あっ!」 「取り敢えず逃げるぞ、

緋晶! 藍玉らんぎょくに捕まったら最後だ!」

凍えてしまいそうな冷気を纏った藍玉が憤怒の形相で追いかけてくる中、二人は笑いながら魔王城の中庭を走り抜けて行ったのであった。

精霊達の囁き（前書き）

前回が「密談？」ならこちらは「密談！」といった所です。

精霊達の囁き

窓から吹き抜こまれる清涼な風が、室内の者達の肌を優しく撫でる。

穏やかな景色が広がる窓の外とは対照的なまでに、室内は殺伐とした空気に包まれていた。

「――…彼の魔王が崩じたと人間族の王が発表してから、最早一月近く」

玲瓏たる声が、言葉を紡ぐ。

告げられた内容に、室内に思い思いの姿勢を取っていた者達が小さく反応した。

「この様な日に貴君らに集まってもらったのは他でもない、彼の魔王の事についてだ」

声の主が、一度口を閉ざす。

室内にいる者達の姿を確認する様に、視線が動く。

その視線に当てられた者達は、ある者はつまらなさそうに、またある者は怯える様に身を縮こまらせた。

「異世界より呼び出された勇者が彼の王を討ったと言う事実は誠に喜ばしい事だ。だがしかし……魔王が討たれたにしては『混ざり者』達の様子が可笑しい。それに証拠たる魔剣を手に入れて尚、人間族の王が静観を貫いていると言う事実もな」

「なーに、それ。そんなのどうだっていーよ。そんな事ばかり気にしているから、木の精霊^{エルフ}達は石頭だって言われるとアタシは思っ
あ」

けられ、と鈴を転がす様な笑声が空気を震わせる。

透き通った硝子戸の嵌められた窓の側で、吹き込んでくる風に身を浸らせていた純白の髪の少女が笑っていた。

「慎め、風の精霊族^{シルフ}。今回の事が真であれば、あの汚らしい『混^ま族^{ぞく}』を駆逐する、またとない機会となるのだぞ」

「あー、俺が思うにだな。木の精霊族^{エルフ}の御仁。そこまで魔族のする事為す事に気を尖らせなくてもいいじゃないか」

「ボ、ボクもそう思います。魔族の人達をあまり悪く言わない方が……」

風の精霊族^{シルフ}の少女を睨んだ木の精霊族^{エルフ}に向けて、椅子にふんぞり返る様にして座っていた偉丈夫と、部屋の隅で身を丸くしていた少年が意見する。

「ハッ！ 精霊族随一の力を謳われる火の精霊族^{ドラゴン}と大陸一の技術を誇る土の精霊族^{ドワーフ}が零落れたものだ。あのような者達を庇う様な発言をするなど」

「だ、だって……！」

大きく体を震えさせながらも、果敢に何かを口にしようとしていた土の精霊族^{ドワーフ}の少年を溜め息を吐いた火の精霊族^{ドラゴン}の偉丈夫が溜め息を吐きつつ制する。

「そんなカッコしちやダメよ、木の精霊族^{エルフ}の若君。数少ない純血の精霊族同士、仲良くしましょうよ」

木の精霊族^{エルフ}の青年を優しく宥めたのは、僅かに青味を帯びた肌に丈の長い服を纏っている女であった。

水の精霊族特有の、水面に揺らめく藻を思わせる手触りの良さそう
な青い髪の毛が風に巻き上げられる。

「どのみち皆様がここに居るって事は、どなたの一族も彼の麗しき魔王陛下が気になる訳でしょう？　幸い、人間国の国王陛下が我々精霊族も魔族との会合に同席する事を許されたのだから、実際に魔王配下の魔族達の様子を見て今後の方針を決めればいいじゃない」

室内にいる、一族の代表として送り込まれた精霊族の者達がその言葉に押し黙る。

——白髪シルフの風の精霊族の少女は愉快そうに。

——火の精霊族ドラゴンの偉丈夫は重厚な面持ちで。

——小柄な土の精霊族ドワーフの少年はおどおどと。

——水の精霊族ウンデイナーの女は婉然と微笑みながら。——苦々し気に眉根を寄せて、木の精霊族エルフの青年は窓の向こうを見やる。

魔王崩御の噂が大陸中を吹き抜けて初めて、魔族達が公の場に姿を現す。

——————今後の方針を見定めるためにも、この機会を見逃す訳にはいかなかった。

精霊達の囁き（後書き）

ああ、シリアス。

精霊族の特色や特徴などはまた改めて。

ひと時

真っ直ぐに生えた柱に、ぴったりと背筋を添わせる。

好奇心と若干の期待に満ちた琥珀の瞳が、上目づかいに自分の頭の上で動く二本の手の様子を伺っていた。

「どうだ、どうだ？」

「あんま動かないでね、陛下。ん、これで、よし！」

動く許可をもらってから、今は子供姿の魔王は添わしていた背を柱から離す。

ちようど魔王の頭程度の高さに、魔王が今まで背をくつつけていた柱の面にはひっかき傷がついていた。

「それで？ どうなんだ、ひしろう緋晶？」

「えーっと、……前回とあんまり変わってないね」

「そんなー！！」

かなりの衝撃を受けた表情の魔王に、緋晶は苦笑する。

「陛下。背の高さっていうのは、一朝一夕……一月で変わる様な物じゃないよ。陛下もそうだったでしょ？」

「そうなのか？ オレは生まれた時からああだったからな。そう言われてもわからんのだが」

心底不思議そうに首を傾げている。

見た目の幼い言動とは裏腹に当たり前に告げられた言葉に、緋晶はかすかに緋色の瞳を陰しくした。

この世界に生を受けた者は、例え強大な力を持っていた神族であっても非力な赤子姿で生まれてくる。

魔王の言葉が事実であれば、それが意味するのはどういふことなのだろうか。

「――ま、いっか。陛下が何であれ陛下は陛下だし」

「なんか言ったか、緋晶？」

「んー、別に」

警戒とでも称すべき色が緋色の瞳をよぎるが、すぐさま霧散した。常のお茶らけた雰囲気を取り戻した側近に魔王は再度首を傾げたが、特に言及する事はなかった。

「あのさあ、陛下。前々から聞きたいことがあったんだけど」

「なんだ？」

「陛下ってさあ、男？ 女？ どっちなの？」

「……どっちに見える？」

愉快そうに悪戯を考えている子供の顔になった魔王が、椅子の上に器用に胡坐をかく。

その姿を頭から足先までじっくりと眺めた後、緋晶は口を開いた。

「俺からは……男に見えるね」

「ほう、そうか。ではそれでいいのではないか？」

光を吸い込む黒髪が音を立てて揺れる。

金色がかった琥珀の瞳が猫のように細められた。

「でもさあ。前に藍玉らんぎょくに尋ねたらあいつは“女”に見えるって言うてたし、蒼氷そうひのじい様と朱炎しゅえんの姐さんは“男”って言うてたよ」

「ふうん。藍玉の目にはオレは女に映るのか。……なるほどね」

軽く目を眇めて、魔王は行儀悪く組んだ脚の上に肘をつく。

琥珀の瞳が緋晶の方へと向けられた。

「これはオレ自身が国を興してから気付いた事なのだが、オレを男とみるか女とみるかは、見る者がオレをどのような対象として見ているのかに関係するようだ」

「つまり？」

「オレに自身の父や兄、または異性としての男を求める者であればオレは“男”。逆に、母や姉、同性の友人といった対象を願う者であればオレは“女”として映る。——例えばの話だが、灰砂かいさの妻である青蘭嬢せいらんはオレをこの国での頼りになる友人として見たために、オレは“女”としてしか彼女の眼には映らない。逆に、夫の灰砂はオレに死んだ父親のイメージを長年投影して見ていたのもあって、オレの事が“男”としか思えないそうだ」

その言葉に緋晶の脳裏に古い思い出が過る。

火の精霊族ドランゴンの男と人間の女の混血児である彼は、魔王の手で保護された時には既に、自分の父親にあたる男の姿を知らなかった。

そのため幼かった彼は、全ての魔族達に等しく父であり母である魔王に対し、いまだ見ぬ父親の影を求め、そして見出したのだ。

「なるほど……。俺にとって父親は陛下だからね。だから俺の目には陛下は男に映るのか」

「納得いだたけたようで何よりだ」

「でもさ、それって結局、陛下が男なのか女なのかについての根本的な答えになってないんじゃない？」

「……………」

———鋭すぎる突っ込みに、魔王はただただ沈黙を貫いただけであった。

出発の日（前書き）

すこし時間が進みます。

これまで閑話的な話でしたが、この話から物語が走り出します。

出発の日

黒地に銀の刺繍の施された、麗々たる軍服に身を包んだ魔族の兵士達。
いななき

？を上げて、荒々しく尾を振る軍馬の側に手綱を掴んだ姿勢で佇んでいる軍の精鋭達は、皆同じ方向を見つめていた。

遙かな大昔から、出立する兵士の見送りや華々しい式典の時にのみ使われる、魔王城の城門へと通ずる巨大な広場。

その一段と高い所に設けられた、この様な日のための特別な舞台。
城内で働く者や旅行く者達の関係者を始めとする大勢の視線が集まる壇上には、魔王補佐である藍玉と筆頭文官である朱炎、そして彼女の数名の部下達の姿があった。

「陛下の勅命によって、貴女に命じます。筆頭文官・朱炎、これより人間族の王国へと旅立ち、彼の国での剣によらざる戦いを制して来なさい」

「――勅命、謹んで承りました。必ずや、陛下のご期待に応えて彼の国での戦場を制してみせましょう」

魔王の代理でも藍玉の手から、朱炎の手へと書状が渡される。

親書を兼ねている書状を大事そうに両手で抱えると、朱炎の明るい若葉色の瞳が前を見据える。

普段の深いスリットの入ったドレス姿とはまた違う、長旅用のカッチリとした男性用の衣装に身を包んだ彼女の姿は男装の麗人を思わせた。

彼女の肩にかけられていたマントが大きく翻り、長靴が高らかに靴音を鳴らす。

凜々しい女騎士を思わせる華麗な姿に、誰もが息を飲んだ。

＊ ＊ ＊ ＊

———そんな彼女の姿を、魔王は広場に面した塔の一つから見守っていた。

深沈たる知性の輝きと姿に似合わぬ老成した光を灯す琥珀色の瞳は、眼下の魔族の兵士達とこれから旅立つ朱炎を始めとする文官達の姿から離れない。

「——…ご心配の様ですのう？」

「蒼氷^{そうつひ}」

幼さの残る声には似合わぬ年老いた喋り方。

群青色の巻き毛に、固く閉ざされた両眼の持ち主——筆頭判官^{ひつとうしやうかん}である蒼氷だった。

「後悔、しておいでですかのう？ 戯れとはいえ、勇者に討たれる

様な事をなさったことを」

「勇者に討たれた真似をしでかした事は、別に何とも思っていないさ。これから起こる事、それこそがオレが求めた物になるのだから」

「——これから大陸が……世界が変わるでしょうな。今までに無い勢いで」

「ああ。オレが国を興してから、およそ何千年という月日が流れた。しかし、それによって世界が停滞しかけていたのも事実だ」

琥珀の瞳が見つめる先で、朱炎を始めとする魔族の文官達が馬車へと乗り込んだのを合図に、待機していた魔族の兵士達も各々自分の馬へと跨がっている。

整然とした動きのまま城門へと進む一同を、城内の者達や旅立つ

者達の関係者達がそれぞれの思いを胸に抱いたまま、見送る。

「オレは依存を好まない。オレの元にいる全ての子供達を愛しく思うが、そのまま彼らがオレに全てを任せて、ただただ墮落していく有様を見たいとは思わんね」

「詰まる所、これを一つの試金石とする訳ですかのう？」

「そうなるだろうな。——となれば魔族だけじゃない、世界すらもこれを契機に大きく動き出すだろうよ」

気が遠くなる程の長い年月をかけて、この国は力を蓄えた。

例え、他国の者達がちよっかいを掛けて来た所で簡単に揺らぐ様な事はないと自信を持って断言出来る様になるまで。

それは長い長い時をかけて、魔王が魔族をこの国を守って来た結果でもある。

——実際、このまま守られ続けた方がきっと簡単だろうが、それだけでは生まれるべき芽は摘み取られ、咲き誇る筈だった花は直ぐさま枯れてしまいかねないし、同時にそれは魔王の望む所ではない。

「————行っておいで、オレの愛しい娘。お前の蒔く種はこれから先の世界での、確かな切欠となるだろう。オレはお前が、お前達がどのような華を咲かすのか、楽しみに待つ事にするよ」

優しい声で、魔王は謳う様に言祝ぐ。^{いとしほ}

祈る様に祝う様に、優しく切なげな声で呟かれたそれは、側にいる蒼氷の耳にも届く事なく、ただ空気へと柔らかに溶けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0974y/>

魔王陛下、お仕事ですよ

2011年12月25日15時40分発行